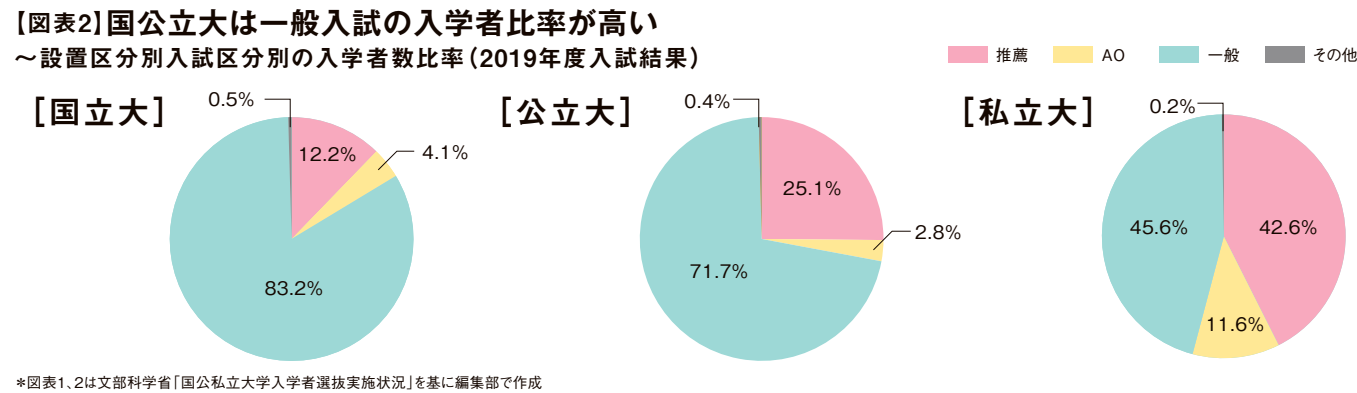
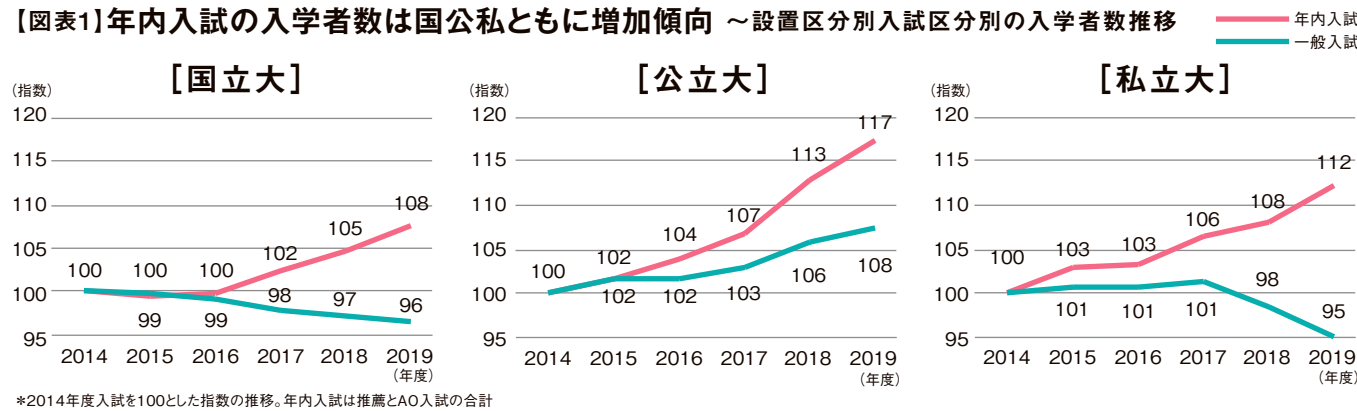




【図表3】新入試における年内入試の主な内容

	総合型選抜	学校推薦型選抜
内容	受験生自らが表現する能力・適性、学習意欲、目的意識等の評価に重点を置く入試	高校が在学中の学習成果を評価したうえで、大学に対して行う推薦に重点を置く入試
スケジュール	出願は9月以降、合格発表は11月以降 ※2021年度入試の出願は9月15日以降	出願は11月以降、合格発表は12月以降
募集人員	募集人員については制限を設けない	大学は募集単位ごとの入学定員の5割を超えない範囲で設定
評価	学力の3要素を各入試区分で評価	
調査書	「両面1枚」の制限の撤廃、「評定平均値」の呼称を「学習成績の状況」に改めるなど	
入学前教育	12月以前に入学手続きを取った者に対しては積極的に入学後の学修準備を講ずるように努める	

※文部科学省資料をもとに作成

者の獲得が、年内入試における課題となっています。

一方、以前から年内入試の入学比率が高い私立大では事情が異なります。入学定員管理厳格化による合格者数の絞り込みで競争が激しくなった一般入試を避け、比較的安全に合格できる年内入試を選ぶ受験生が増えています。事実、多くの大学から、「これまで受験者がいなかった高校からも指定校推薦で受けに来るようになった」といった声が聞かれます。受験生の安全志向が、年内入試で入学人数が増加する要因となっているのです。

本年度は、さらに年内入試の利用が高まることが予想されます。なぜなら、コロナ禍で先の見通しが立たない中、受験生は「早めに合格を決めたい」、大学側も「入学者を早めに確保するため年内入試で可能な限り合格を出したい」と考えているからです。受験生・大学、双方の安全志向が高まる中、年内入試が「安易な大学合格」「入学確保」の手段になりかねない点が、私立大における課題だと言えるでしょう。

【図表3】は新入試における年内入試の主な内容をまとめたものです。改めて要点を押さえておきましょう。

選抜から接続へ

これからの 年内入試

18歳人口が減少する中、
自学が欲しい学生は待っているだけでは現れない。
「選抜」を工夫するだけでなく、教育を「接続」し、
高校生・高校・大学がWIN-WIN-WINの関係となる
年内入試の新たな形を考えていく。



問題提起

高校と大学が共に高校生を育てる 「教育接続」型の年内入試へ

入学者の拡大が続く
年内入試



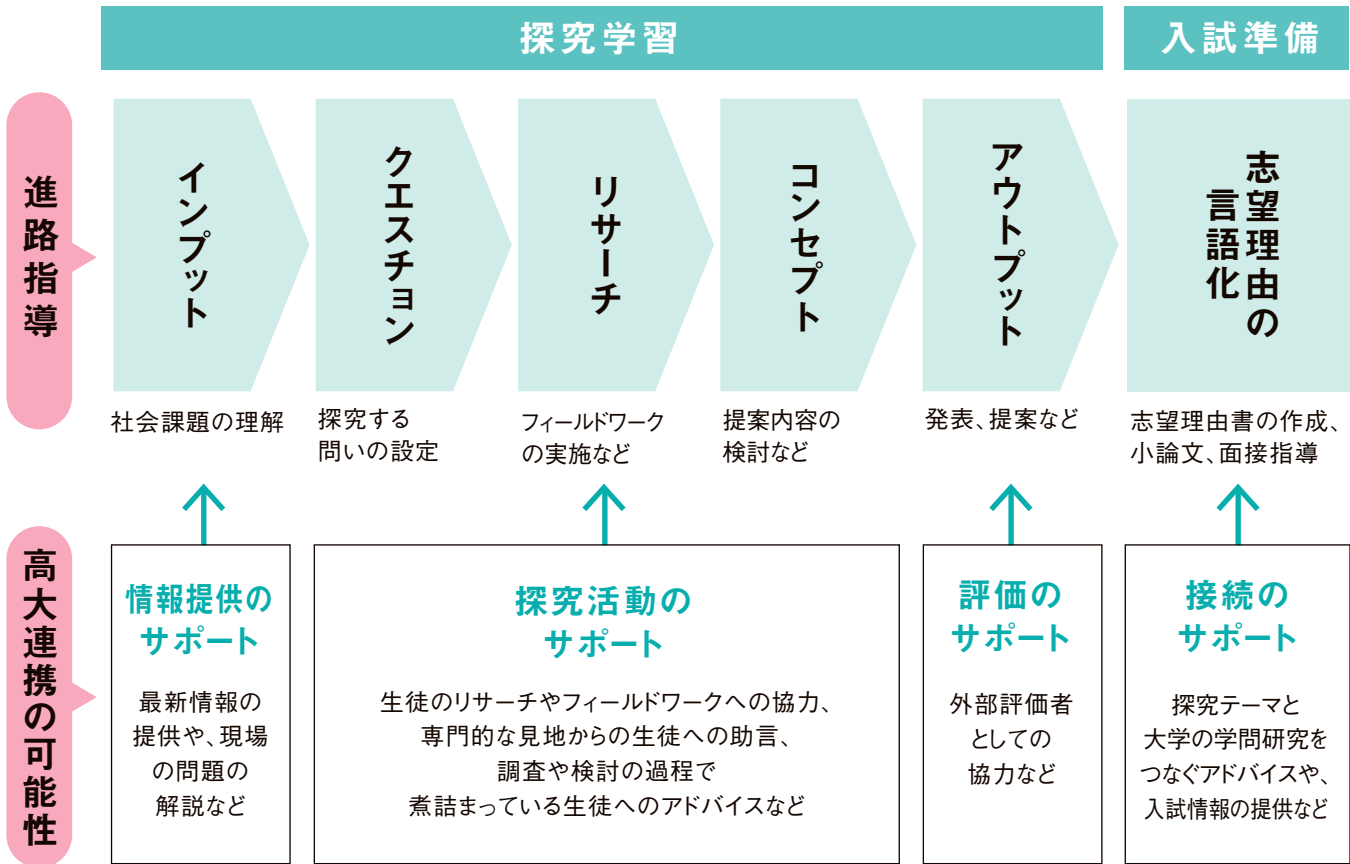
（株）進研ア・Between 編集長
中村浩二

なかもらこうじ●1990年（株）福武書店（現ベネッセコーポレーション）に入社。高校事業部にて高校の教育改革支援に携わった後、（株）進研アド九州支社勤務を経て現職。

今、国公立大とともに、年内入試と呼ばれるAO・推薦入試（新名称…総合型選抜・学校推薦型選抜）での入学人数が、一般入試を上回る伸び率で増えています【図表1】。

国立大で年内入試の入学者が増えた要因としては、国立大学協会が2015年9月に「国立大学の将来ビジョンに関するアクションプラン」の中で、入学定員の30%を目標にAO・推薦入試などを拡大すると発表したことが挙げられます。これは、一般入試の入学者比率が高い状況を見直し【図表2】、多様な資質を持った入学者の受け入れ拡大を図ることが目的です。同じく、公立大も入試の多様化を進めていることが、年内入試入学者の増加に拍車をかけています。国公立大では、多様な入学

【図表5】探究学習を基にした進路指導と高大連携の可能性



では、教育を接続するために入試はどうあるべきか？ 今回の特集では、「接続」を重視した入試の事例として、4大学を取り上げています。

島根大学（P.20）の総合型選抜「へるん入試」は、探究学習などで芽生えた課題意識や貢献意識

入試を介して 高大の教育を接続する

年入試では、時間をかけて受験生の資質・能力を多面的・総合的に評価できるため、大学入学後に伸びる可能性を持った「多様な入学者」の獲得が可能です。しかし、受験生が大学に合格したことで満足してしまい、それまでに培ってきた学力や学習習慣、志望理由を入学前にリセットしてしまいうようなでは、選抜の時に評価した資質・能力を入学後の学修につなげて伸ばすことが難しくなります。せっかくポテンシャルの高い学生を獲得したわけですから、彼らを大学の教育にしっかりと接続するしくみを整えることが重要ではないでしょうか【図表4】。

その際、注目したいのが高校で広まりつつある「探究学習」です。探究学習とは、一言でいうと、生徒が社会問題に対する自分なりの問いを設定し、その解決策を探求していく学習です。そこで取り組んだテーマや、活動中に得た経験は、高校生が自分の将来を考える際の軸になるものです。さらに社会問題をテーマに自分自身と向き合うため、高校と大学を通じた学ぶ目的の醸成につながります。そのため、高校の探究学習に大学

【図表5】には、P.32で紹介している岡山県立瀬戸高校の取り組みを基に、探究学習の流れと、高大連携の可能性を整理しています。主に1、2年次に取り組む探究学習では、情報提供や探究活動評価において大学のサポートが必要だと考えられます。入試準備においては、探究で深めたテーマと大学の学問研究を接続するサポートが、大学に求められると考えられます。ここでは、探究学習で取り組んだ高校生のやりたいことが軸になるため、一方的な情報提供よりも、高校生の話を聞いて自学で何が学べるかを提案する支援が必要とされます。このように「大学本位」ではなく、「高校生本位」である点が、これまでの接続のあり方とは大きく異なります。

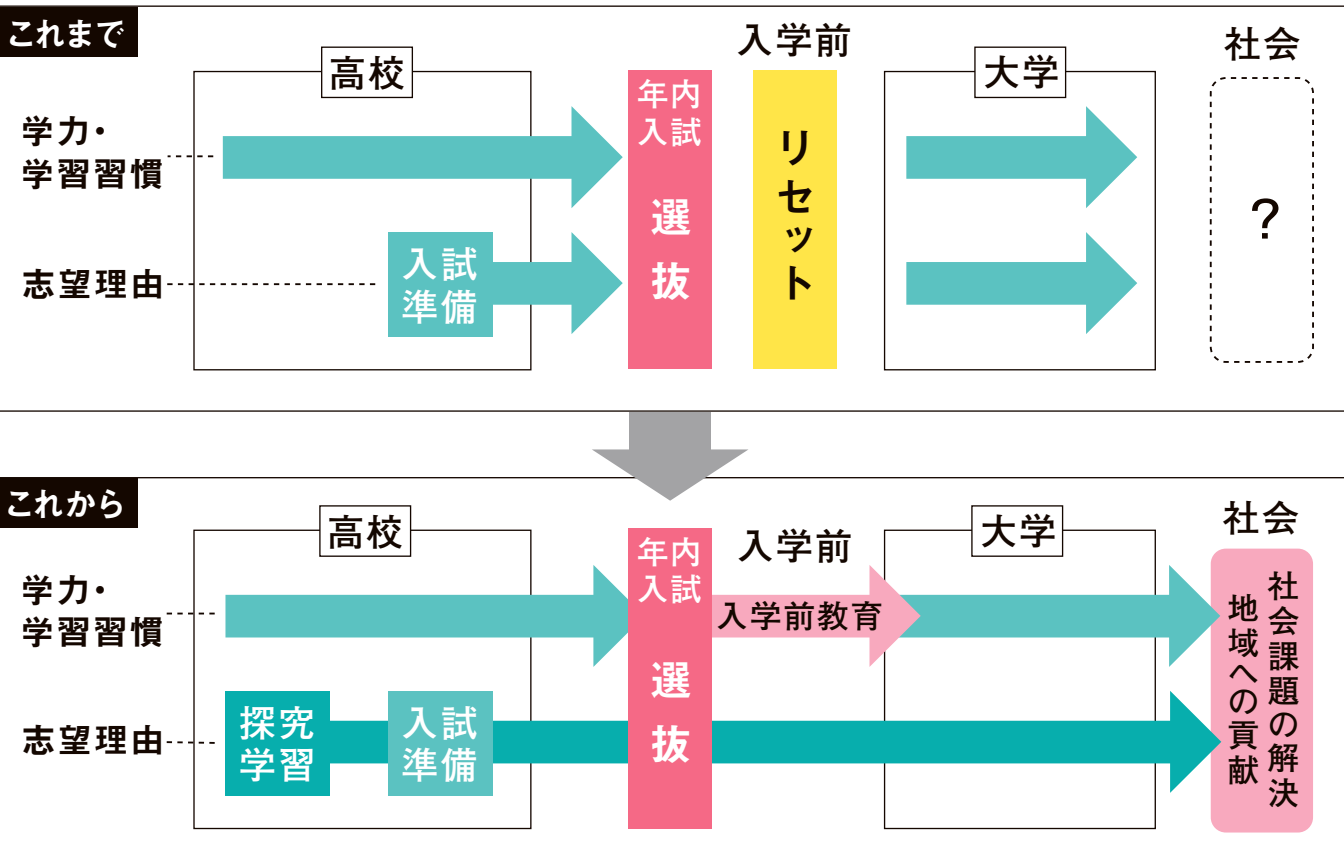
入試のしくみを変えるだけでなく、入学前教育を通して合格者を大学教育に接続することも大切です。今号では、学力・学習力・モチベーションの3要素をバランスよく育てて、1年次の前期までに学修スタイルの確立を図る城西大学薬学部医療栄養学科の取り組み（P.26）を紹介しています。

18歳人口が減少する中、競争を前提とした選抜から、高校と大学が共に高校生を育てる「教育接続」型に入試を転換することが今、必要なのではないでしょうか。

が関わることは、すなわち大学で学ぶ意欲の高い学生を育てることにつながるのです。

大学が高校と共に探究学習を通して、生徒の「地域への貢献」や「社会課題の解決」といった意識を育て、合格後も継続してそれらを深める教育を提供できたなら、学生は大学でも変わることなく意欲的に学ぶようになるでしょう。

【図表4】これからの年内入試のあり方



*図表4、5は編集部作成

選抜の工夫だけでなく 教育との接続を図る

年入試では、時間をかけて受験生の資質・能力を多面的・総合的に評価できるため、大学入学後に伸びる可能性を持った「多様な入学者」の獲得が可能です。しかし、受験生が大学に合格したことで満足してしまい、それまでに培ってきた学力や学習習慣、志望理由を入学前にリセットしてしまいうようなでは、選抜の時に評価した資質・能力を入学後の学修につなげて伸ばすことが難しくなります。せっかくポテンシャルの高い学生を獲得したわけですから、彼らを大学の教育にしっかりと接続するしくみを整えることが重要ではないでしょうか【図表4】。

その際、注目したいのが高校で広まりつつある「探究学習」です。探究学習とは、一言でいうと、生徒が社会問題に対する自分なりの問いを設定し、その解決策を探求していく学習です。そこで取り組んだテーマや、活動中に得た経験は、高校生が自分の将来を考える際の軸になるものです。さらに社会問題をテーマに自分自身と向き合うため、高校と大学を通じた学ぶ目的の醸成につながります。そのため、高校の探究学習に大学

大学が高校の教育に積極的に関われば、高校生や高校教員に自学の教育内容や人材育成に対する姿勢を伝えることができます。

例えば、桜美林大学（P.28）では、自学が企画する高大接続プログラムに、高校生や連携する高校が参加する形で探究学習の支援を行い、高校と共に高校生を育てています。

高崎商科大学（P.22）では、自学の教育に取り入れているブレインストーミングを、高校生・教員向けのワークショップとして提供し、探究学習の推進をサポートしています。こうした取り組みで自学の教育に対する期待や信頼が高まれば、年内入試が「安易な大学合格の手段」になることはない

高校教育の変化は 志望理由育成の好機

大学が高校と共に探究学習を通して、生徒の「地域への貢献」や「社会課題の解決」といった意識を育て、合格後も継続してそれらを深める教育を提供できたなら、学生は大学でも変わることなく意欲的に学ぶようになるでしょう。

編集部が注目した年内入試【国立大学】

	小樽商科大学	電気通信大学	金沢大学	滋賀大学	島根大学
年内入試比率 （年内入試募集人員／全募集人員）	135人※／465人(29%) ※出願期間が2021年1月14日～21日の昼間コース学校推薦型選抜含む	91人※／690人(13%) ※夜間主課程を除く	182人※／1726人(11%) ※2021年2月に実施する「KUGS特別入試(医学類)」および「薬学類・高大院接続入試」含む	230人／790人(29%)	254人／1157人(22%)
注目の年内入試	グローバル総合入試(総合型選抜) 合格者20人中最大5人はギャップイヤープログラムに参加可能。入学を1年間猶予し、1セメスター(8～12月)語学留学を行う ▶実施学科：経済、商【一般枠】(15人) ▶出願条件：CEFR B1以上 ▶選抜方法：＜第一次選抜＞書類選考 ＜第二次選抜＞英語および日本語による口頭試問 ▶出願条件：数学Ⅲを履修、英語資格・検定試験を受検 ▶選抜方法：＜第一次選抜＞書類選考 ＜第二次選抜＞英語および日本語による口頭試問 学校推薦型選抜 【一般枠】(85人) 【専門学科・総合学科枠】(10人)※同一高校からの推薦は2枠合計で4人以内 ▶実施学科：全学科 ▶選抜方法：大学入学共通テスト(国語、数学、英語の中から1教科)の成績、自己推薦書、調査書、推薦書。面接は行わない	総合型選抜 ▶実施学部：情報理工学域Ⅰ類(情報系)、Ⅱ類(融合系)、Ⅲ類(理工系) ▶選抜方法：＜第一次選考＞調査書、志望理由書、活動実績報告書による書類選考。活動実績報告書には、各類で指定する活動について記載する。(例)Ⅲ類：次の①および②をまとめたものを作成。①大学実施のUECスクールや他大学でのスクーリング・セミナー参加、科学系オリンピック、学外研究発表会等の活動実績の一覧と内容の紹介 ②高校等での理工学に関する代表的な研究の内容。関連する基礎的な原理・法則・応用などを含めて、研究方法と結果を説明する。図表や式を含めてもよい ＜第二次選考＞面接試験。各類ごとに、定められた方法で行う(例)Ⅲ類：活動実績報告書の内容に関するプレゼンテーション(10分程度)と、その内容や提出書類に関する質疑応答を中心とする面接・口頭試問(20分程度)を実施し、活動内容に関する理解、論理的かつ明快に説明する能力、理工学に関する基礎学力と適性および関連する能力を総合的に評価する	KUGS特別入試 「基礎的知識・技能を修得し、それらを活用して自ら課題を発見し、探究する能力を備えている人」「将来に明確な目標を持っており、主体的に行動し、他者と協働しながら、自身の夢を実現しようとする強い意欲を持っている人」を募集 ▶実施学域：全学域(一部の学類を除く) ▶出願条件：KUGS高大接続プログラムを受講。課題レポート「大学での学び」「高校での学び」を提出し、大学の評価基準をクリアすること ▶選抜方法：全ての募集単位で口述試験を重視する。【総合型選抜Ⅰ】【学校推薦型選抜Ⅰ】大学入学共通テスト受験を必要としない【総合型選抜Ⅱ】【学校推薦型選抜Ⅱ】大学入学共通テスト受験を必要とする 超然特別入試 ▶実施学域：全学域(一部の学類を除く) 【A-lympiad(エーリンピアード)選抜】数学的に特異な才能を持ち、その才能を生かして将来専門的分野で社会的な課題の解決に取り組む強い意欲を持っている人を募集。【超然文学選抜】文学的分野で社会的な課題の解決に取り組む強い意欲を持っている人を募集。＜出願条件＞いずれも、大学が行うコンテストに入賞すること	総合型選抜 ▶実施学部：全学部 ▶出願条件：学部・募集型によって異なる ▶選抜方法：＜第一次選考＞学部・募集型によって異なる ＜第二次選考＞主に面接 ＜最終選考＞大学共通テストで規定以上の点数(学部・募集型によって異なる)を取る こと(データサイエンス学部の例) 【データサイエンス講座受講型】＜出願条件＞キャンパスで開講するデータサイエンス講座を受講＜第一次選考＞調査書、志望理由書、講義の課題レポートおよび取得資格(加点) 【オンライン講座受講型】＜出願条件＞学部がWeb配信するMOOCを視聴 ＜第一次選考＞調査書、志望理由書、オンライン講義の課題レポート、小論文および取得資格(加点) 【実績評価型】＜出願条件＞全国規模で開催されるデータ分析やプログラミングに関するコンペティション等への参加経験者 ＜第一次選考＞出願書類(調査書、志望理由書、実績報告レポート)、取得資格(加点)	へるん入試(総合型選抜) ▶実施学部：法文、教育(学校教育課程Ⅱ類)、総合理工、生物資源科学 ▶選抜方法：【へるん一般型】(178人)大学の学びで必要な特定の領域・事象に対する強い好奇心と探究心「学びのタネ」がある生徒を募集する入試。共通テストは課さず、①調査書およびクロスアップシート(高校生活で力を入れて取り組んだ活動報告書) ②読解・表現力試験、数理基礎テスト(一部の学科を除く総合理工学部) ③志望理由書を用いた面接 【へるん特定型】(76人)「学びのタネ」+特定の技能等のある生徒を募集する入試。へるん一般型と同じ評価法+下記の付加評価項目 ・地域志向入試→地域志向レポートに基づく面接 ・専門高校入試→専門教科の評定や、資格・検定など加点 ・グローバル英語入試→英語外部検定試験の一定のスコア取得が出願要件。面接による英語活用能力評価、英語外部検定試験のスコア加点など ・芸術・スポーツ・技能入試→実技評価
コロナ禍対応 (感染予防、学習の遅れ等)	▶グローバル総合入試において出願条件となっている民間の英語検定試験に関し、利用期間を延伸	▶総合型選抜について、受験者の学習の遅れに配慮し出願期間を変更	▶経済学類のKUGS特別入試(学校推薦型選抜Ⅰ)では、TOEIC(L&R)に代えて、口述試験の一部を英語にて実施することで英語能力を評価する	▶総合型選抜において、出願期間を変更。教育学部の第二次選抜の集団討論は実施しない	▶出願資格や付加評価項目から英語資格・検定試験や関連する有資格について除外
入学前教育 (内容と担当部署)	▶1年間の入学猶予期間を伴うギャップイヤープログラム履修生(最大5人)対象：5月からのギャップイヤープログラム派遣先大学(ハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジ)で十分に学修できるよう、英語力を強化するため、高校生になじみの少ないTOEFL対策を実施し、ギャップイヤープログラム派遣までの3か月でペーパーベースで500以上のスコアを目標。4月以降は、本学共通科目「外国事情Ⅱ」(2単位)を履修 ▶担当：グローバル教育部門担当教員 ▶その他：国際交流担当職員による派遣先大学のアプリケーション作成やビザ取得、航空機や現地宿泊施設の手配などのアドバイスや危機管理に関する説明などを実施。「外国事情」および派遣先で修得した単位は、本学の入学前既修得単位として認定されることがある ※外国事情：派遣留学に参加する学生を対象として実施。留学前の事前指導や、留学中の月次レポート提出、留学後の事後指導の参加などが義務付け	▶各類の判断で、必要に応じて課している	▶「KUGS高大接続プログラム」の課題レポートについて、評価コメントやポータルサイトを通じた質問、オンラインでの個別面談に基づく指導を行い、大学でのレポート作成に関する基本的な技能を修得できるように支援。レポート作成に関するeラーニング教材も提供。また、多様な学問領域のセミナー動画が常時視聴可能となっており、大学における学修や研究の実際についての理解を深めるための機会を提供 ▶担当：高大接続コア・センター	▶学校推薦型選抜や社会人選抜、総合型選抜などの合格者が対象。遠隔地居住の合格者も参加しやすいように、動画コンテンツやeラーニングシステムを利用した入学前教育を実施。在学生英語自主学習用の英語eラーニングシステムを利用した英語教育プログラムも実施。入学後に受験するTOEICに準備したeラーニング教材。1年次の必修科目「大学英語入門」の先取り学習を兼ねる ▶担当：高大接続・入試センター	▶へるん入試合格者が対象 ①全学共通の課題(英語eラーニング) ②各学部学科各専攻が指定する専門教育の課題 ③2日間にわたる入学前セミナー(グループディスカッションやガイダンス)を含む入学前教育実施(本年はオンラインで実施予定) ▶担当：②は各学部学科各専攻、①③は全学
入学後の特徴的な教育	▶海外での長期学外学修を通じ、国際感覚の涵養や自律的な学習習慣の確立を期待 ▶地域志向科目の履修やさらなる留学等を経て、高い資質を持った「グローバル人材」となることを期待	▶UECグローバルリーダー育成プログラム 3年次から博士前期課程にかけて行われる選抜制の学士・修士一貫教育プログラム。通常より半年早い3年次後期に研究室に配属され、4年次の秋までに卒業研究を終了。学域卒業までの期間に、国内外の研究機関や海外の大学などで研修を行う。大学院では、セミナーやカンファレンスを自身で企画し、運営する ▶UECパスポートプログラム 自主研究を通して、研究者・技術者としての能力を養成する選抜制プログラム。1年次は学内外の研究者から最先端の科学・技術について学び、2、3年次は研究者や大学院生の指導のもとで自主研究。大学関連発表会等で成果を発表する	▶共通教育、学士課程、大学院課程、全ての教育がKUGS(金沢大学＜グローバル＞スタンダード)に基づいて行われる。カリキュラム改革もKUGSに基づいて行われており、2016年度には約300科目だった共通教育科目を、5つのスタンダードで整理・集約し、30の共通教育のGS科目とした	▶データサイエンス教育の全学への展開。全学共通教養科目に「数理・データサイエンス領域」を設け全学部学生に必修化。2020年度からは「数理・データサイエンス・AI領域」とし、AIの要素を取り入れた科目を開講。教育学部、経済学部の学生はデータの理解と取り扱いを会得し、データサイエンス学部の学生は教育や経済を中心にさまざまな領域の基礎的知識を修得、幅広い分野に応用のきく人材を育成	▶へるん入試合格者が対象 ①英語の特別補習授業実施(へるん入試合格者以外にも適用) ②各学生の「学びのタネ」をより深化、展開するために、1年次から各専門分野に触れる機会を設ける ③担任教員による学びの相談、サポートを行う「フレッシュゼミナール」の実施(学部によりへるん入試合格者以外にも適用)
高大連携の取り組み	▶出前講座。小樽商科大学での学びを入学前に知ってもらう必要性を鑑み、要望があれば実施 ▶模擬講義、キャンパス見学等。ただし現在はコロナ禍の影響で行っていない	▶高大接続教育プログラム「UECスクール」 高校1、2年生が対象。「大学で何を学ぶか、どのように学ぶか」を理解してもらうことを目的に、実験・演習を取り入れた2つのプログラムを開講。「先取り学修」では、大学生と同じ教材でeラーニングとスクーリングによりRubyなどのプログラミングを学ぶ。入学後は同大学の単位を認定。「高大接続教室」は理科学実験とプログラミング入門の2つのコースがあり8、10、12月の3回にわたって実施 ▶出張講義はオンラインでの実施も受け付ける	▶KUGS高大接続プログラム 興味のある個別プログラムを選んで受講 【KUGS Live セミナー】対面参加型 【KUGS ラウンドテーブル】テーブルを囲み話題提供者のテーマにより自由に意見を交換しながら議論 【KUGS Web セミナー】Web視聴型 ※いずれも年間を通して受講可能	▶滋賀県立高等学校生徒を対象に大学連携講座を実施。ただし本年度は、受講者および大学関係者の健康・安全面を確保する観点から開催を中止	▶高校単位でのワークショップ形式の大学訪問。「地域の未来」をテーマに、個人ワーク→学部訪問→グループワーク→個人ワークと、順に取り組みながら自らの興味・関心や問題意識をこぼしにして、各自の問題意識と大学(学部・学科)の取り組みをつなぎ、好奇心や探究心(学びのタネ)を深めていく ▶出張講義

*2020年8月時点。最新の情報は各大学のWebサイト等をご確認ください

REPORT

注目の年内入試一覧

入試内容は？入学前教育は？コロナ禍対応は？

改革元年となる今秋の年内入試。各大学はどんな入試を行い、いかに入学前後の教育につなげているのか。編集部が注目した国公私15校の入試を中心に、状況を調べてみた。

年内入試比率

国大協が掲げた30%目標の状況は？

私立大学は年内入試比率が50%以上の大学も多いが、近年比率を高めつつある国公立大学の状況はどうか。まず気になるのは、国立大学協会が掲げた「2021年度までに総合型・学校推薦型選抜の占める割合を入学定員の30%とする」という目標の状況だ。編集部の調査によると、地域別では東北、四国が比較的高く、大学別に見ると30%を超えたのは室蘭工業大学(40%)、高知大学(33・3%)、弘前大学(32・4%)など。旧帝大では東北大学が唯一、28%と30%に近い水準だった。

一方公立大学は、年内入試比率30%以上の大学が4割弱。特筆すべきは、大学周辺地域出身者対象の「地域枠」入試だ。この入試の比率が30%以上を占める公立大学

は、25%弱(いずれも編集部調べ)。P.8で掲載した公立大学の中では、例えば公立鳥取環境大学は学校推薦型選抜において、Ⅰ型の^{*1}地域枠に加え、県内高校出身者のみを募る^{*2}Ⅱ型、^{*3}Ⅲ型を新設した。島根県立大学の学校推薦型選抜(連携校推薦)は、育成型の地域枠と言えそうだ。県内の高校に対し、夏季講習や中間発表会など地域づくりに関する学習機会を提供し、参加を同選抜の^{*4}出願条件としている。

なお、国立大学でも、地方を中心に「地域枠」の活用がめだつてきた。地方国立大学は今後、^{*5}国の支援を背景にした定員増が見込まれる。地方の公立、私立大学においては、年内入試を含め募集全体に影響があると考えられる。地元の受験生を呼び込む手段について、検討にさらに力を入れたい。

年内入試の内容

高校生を育てて迎える育成型の入試に注目

今回は、入学後の大学教育がよく伝わる入試内容であるだけでなく、高大接続の取り組みや入学前教育を含む「高大接続プログラム」として設計された入試に着目した。高校教員や高校生にとって、

*1 経営学部のみ *2 両学部 *3 環境学部のみ
*4 本年はコロナ禍により志望理由書に代替 *5 内閣府「まち・ひととしと創生基本方針2020」(7月に閣議決定)

編集部が注目した年内入試【公立大学】

	三重県立看護大学	県立広島大学	公立鳥取環境大学	島根県立大学	熊本県立大学
年内入試比率 （年内入試募集人員／全募集人員）	40人／100人（40％）	173人／530人（33％）	150人／300人（50％）	50人／140人（43％）※地域政策学部	127人／480人（26％）
注目の年内入試	特別選抜 ▶出願条件：【学校推薦型選抜】（下記3選抜も含め40人程度） ①三重県内の高校に在学もしくは三重県内に住所があり県外の高校に通学 ②国語、数学、外国語、理科、「地理歴史・公民」の学習成績状況が3.8以上 【地域推薦型選抜】（6人程度） ①推薦市町に4年以上就業する意思を有する者 ②国語、数学、外国語、理科、「地理歴史・公民」の学習状況が4.3以上 ③学校推薦選抜型と併願可だが、地域推薦型選抜での合格が優先 ④化学基礎と生物基礎を履修していることに加え化学または生物を履修 【指定校推薦型選抜】（3人） ①国語、数学、外国語、理科、「地理歴史・公民」の学習状況が3.8以上 ②高校で物理・化学および生物のうち2科目を履修 ③英検準2級またはGTECで690点以上取得し証明書を提出 ④高大接続事業に参加し、看護職者としての適性について考察を経た者【東紀州地域指定校推薦型選抜】（2人） ①本学が指定する東紀州地域内の高校を卒業見込み ②国語、数学、外国語、理科、「地理歴史・公民」の学習状況が4.0以上 ③化学基礎と生物基礎を履修していることに加え化学または生物を履修	学校推薦型選抜 ▶実施学部：全学部（168人） ▶選抜方法：①書類審査：「主体性・協働性」は調査書を中心として評価（5点満点。生物資源科学部のみ30点満点）。【県立広島大学・地域への志向性】は、評価申請書に基づき、自学や他大学が実施している公開講座や高大接続事業等への参加等の取り組みについて、最大5点加算。地域創生学科地域産業コース（応用情報志向枠 県内専門高校推薦のみ）は高校在学中に対象資格の取得者に最大20点の加算（1つのみ） ②個別試験（小論文、面接等） ③大学入学共通テスト。2021年度は原則、受験を免除するが、地域創生学部地域創生学科健康科学コースは下記科目の受験が必要【県内高校推薦】①または②のいずれか。①物理基礎、化学基礎、生物基礎から2科目および物理、化学、生物から1科目 ②物理、化学、生物から2科目【県内専門高校推薦】物理基礎、化学基礎、生物基礎から2科目 総合型選抜 ▶実施学部：生物資源科学部地域資源開発学科（5人） ▶選抜方法：＜第1次選抜＞書類審査（志望理由書・活動実績報告書および調査書） ＜第2次選抜＞面接	学校推薦型選抜 ▶実施学部：【Ⅰ型】環境（30人）、経営（45人。地域枠15人、専門高校枠8人含む）【Ⅱ型】環境（10人）、経営（10人）【Ⅲ型】環境（15人） ▶出願条件：これまでの推薦入試の出願条件の評定平均値3.8以上の基準を廃止。新設するⅡ型、Ⅲ型は鳥取県内の高校出身者のみ ▶選抜方法：【Ⅰ型】出願書類、小論文（100点）および個別面接（10～15分）（100点）。大学入学共通テストは課さない【Ⅱ型】大学入学共通テスト（一般選抜前期日程（A方式）と同じ科目のうち高得点の3教科3科目を採用）の本学が指定する科目の得点（300点）、出願書類、小論文（150点）および個別面接（150点） 【Ⅲ型】出願書類、プレゼンテーション（15分程度）・質疑応答（20分程度）。大学入学共通テストは課さない 総合型選抜 ▶実施学部：環境（20人）、経営（20人） ▶選抜方法：出願書類、模擬授業（レポート）（100点）、集団面接（1グループ30分程度）（50点）、個別面接（15分程度）（50点）	学校推薦型選抜（連携校推薦） 高大接続型の課題探究型授業の取り組みを入試で評価していくことが目的 ▶実施コース：地域づくりコース（20人） ▶出願条件：連携校と指定された島根県内の高校からの推薦（1校当たり2人まで）。評定平均3.5以上、島根県立大学主催の地域づくりに関する夏季講習や中間発表会に参加している者（本年はコロナ禍により志望理由書に代替） ▶選抜方法：地域づくりコースの学びに対する意欲、自己表現能力やコミュニケーション能力などを評価。①プレゼンテーション（100点） ②面接（100点）。調査書、志望理由書を参考資料とする。大学入学共通テストは課さない 総合型選抜・自己推薦（リーダーシップ入試） ▶実施コース：地域づくりコース（10人） ▶出願条件：高校在学中に、主体的にリーダーシップを持った活動を行ったことがある者（生徒会、部活動、NPOや起業などでのリーダー、副リーダーとしての経験） ▶選抜方法：①小論文（100点）基礎学力評価 ②プレゼンテーション（100点） ③個別面接（100点）。大学入学共通テストは課さない	自己推薦型選抜 ▶実施学部：環境共生 居住環境学専攻、総合管理 ※以下、総合管理について取り上げる ▶選抜方法：＜第一次選考＞総合問題（200点） 次の内容により基礎学力を測定する。①現代の社会に関する知識 ②文章の読解力・漢字認識力・表現力 ③英文の読解力 ④統計等の資料の理解力 ＜第二次選考＞面接（100点）、自己推薦書の書類選考（100点） 自己推薦書の評価観点：①総合管理学部のアドミッション・ポリシーに合致するような人材であるか ②本学で学ぶことへの意欲はどの程度か ③本学入学後あるいは本学卒業後の目標はどの程度明確か ※調査書については、面接の際の参考資料としてのみ使用し、評価の対象とはしない
コロナ禍対応 （感染予防、学習の遅れ等）	▶新型コロナウイルス感染症等に罹患した入学志願者の受験機会確保のため、全ての入試区分において追試験を実施 ▶感染拡大により予定していた試験が実施できなくなった場合は、以下のとおり対応 ①学校推薦型選抜、地域推薦型選抜：大学入学共通テストの得点で合否を決定 ②指定校推薦型選抜、東紀州地域指定校推薦型選抜：オンラインにて面接を実施し、合否を決定 ▶指定校推薦型選抜：資格・検定試験は資格に相当する英語力があると認められることが明記されている調査書等、高校の証明書類の提出をもって代替可	▶出願書類および入学手続き書類の窓口での受け付けを中止し、郵送のみ ▶合格者はWebで掲載するとともに、合格者には合格通知書を郵送 ▶地域創生学科地域文化コースにおける学校推薦型選抜の異文化体験枠で、これまで求めてきた「実用英語技能検定」（英検）等の語学資格・検定試験の結果の提出は、2021年度入学者選抜においては不要 ▶受験生に試験場でのマスク着用を要請	▶所定の要件を満たす場合に限り、追試験を実施する。詳細は、募集要項に記載	▶連携校推薦の出願条件のうち、「島根県立大学主催の地域づくりに関する夏季講習や中間発表会に参加」は、本年は志望理由書に代替	▶書類選考において、中止等となった大会等については報告書があれば提出を受け付ける
入学前教育 （内容と担当部署）	▶看護学の基盤となる化学、生物について独自のテキストと動画配信教材を使用した自宅学習とスクーリングを実施 ▶担当：事務局教務学生課	▶生物資源科学部地域資源開発学科：英語、数学、理科について、高校の学習の総まとめとなる通信添削学習 ▶生物資源科学部生命環境学科：高校の学習の総まとめとなる学習を行う ▶担当：庄原キャンパス事務部教学課	▶年内入試合格者に対して、学部ごとに課題学習を課す ▶担当：入試広報課	▶入学までの学習準備について助言したり、課題学習を出したりする ▶担当：アドミッション室	▶年内入試合格者に対し11～3月に「入学前学習支援プログラム」を実施。プレエントランス講座：キャンパスにてガイダンスや講義等を実施。総合管理学部では、オリエンテーション、グループワークを予定 入学前の学習支援：課題を与え、教員が個別に指導等を行う。総合管理学部の課題は、英文和訳や読書感想文を予定 ▶担当：事務局教務入試課入試班
入学後の特徴的な教育	▶特別講座およびフィールドワーク「三重を知ろう」（1年次対象：5～6月） 三重県の看護の質向上の拠点である同大学の学生が、県内地域の人々の暮らしとその背景にある文化を理解し、地域の人々の健康な暮らしをめざす看護職者となるきっかけとするため、三重県知事による講演「三重県の文化と魅力」のほか、大学近隣の歴史的町並みでの暮らしについてのフィールドワークによる「三重を知ろう」を実施 ※本年度のフィールドワークは、実施予定日が新型コロナウイルス感染症対策のための出校停止期間と重なったため中止	▶アクティブ・ラーニングを活用した授業：「行動型学習」と「参加型学習」を組み合わせた「能動的学習」の導入により「課題探究型地域創生人材」を育成 ▶経過選択・コース選択制度の導入：入学後、幅広い教養や専門の基礎などに触れながら興味や関心、将来像などに基づいて主体的にコース選択。経過選択制／地域創生学部地域創生学科（地域文化コース・地域産業コース）一般選抜後期入学者、生物資源科学部生命環境学科（生命科学コース・環境科学コース）一般選抜後期入学者対象コース選択／保健福祉学部一般選抜前期「コース選択枠」入学者対象	▶プロジェクト研究：1、2年次には、学部学年の枠を超えた少人数のチームで環境問題や地域課題など身近なテーマに取り組む「プロジェクト研究」を実施。情報収集・検討、調査・実験、プレゼンテーション、公開に至る研究活動の中で、思考力、判断力、表現力、主体性、協働性など社会で必要な基礎力を実践的に身に付ける	▶1年次から実践型の授業科目（アクティブ・ラーニング）で地域の特徴と課題を把握するスキルを学ぶ。地域住民をはじめとした地域の人々とのさまざまな関係者とのコミュニケーションを通して地域づくりに必要なプロジェクトを実際に企画、立案、実行し評価できる能力を養う。地域との協力・協働による実践的な活動を通して、多様な視点から地域社会を分析し、課題解決に向けたアイデアを具体化できる能力を身に付ける	▶「もやいす」と育成プログラム（全学共通） 1年次は全学生が地域のフィールドワーク、あるいは防災に関する体験学習を受講。以降は選択制で、2年次は地域課題解決に必要なファシリテーションスキル、調査技法を学ぶ。3年次は地域企業から募ったテーマを卒業研究として取り組む「学生GP制度」などに参加する ▶基礎総合管理実践、基礎総合管理実践演習（総合管理学部） 2年次前期に選抜方式で開講。ファシリテーションやフューチャーセッション（多様な立場の参加者が、問いを続けることで目的を創り出し、達成に向けて協働することを目的とした場）の技法を身に付ける
高大連携の取り組み	▶高校生のための看護職キャリアデザイン講座「一日みかんだい生」。学生の体験談、看護職者（看護師・助産師・保健師）による講義とフリートーク、キャリアデザインワークショップを実施。今年はWeb開催 ▶オープンキャンパスの際に未来面談を実施。教職員が進路や将来の悩みを聴く ▶県内高校を本学教員が訪問して、看護職に関心のある高校生を対象に、看護職についての理解を深める「出前授業」を実施	▶広島県教育委員会や県内高校と連携した教育実践発表会の開催、高校生向けの各種公開講座や高校へ出向いての講座の実施など、高大接続の強化を図り自律的なアクティブ・ラーナー育成に関わる取り組みを推進 ▶高校における教育実践を学ぶための授業見学会や県内高校との「高大連携に関する協定」の締結などに取り組み、高校生の視野を広げ、進路に対する意識や学習意欲を高めると共に、大学の求める学生像および教育内容への理解を深め、高校での学びとの接続を意識した大学教育の活性化を図っている	▶出前授業：公立鳥取環境大学での授業の様子を知ってもらうために要望があれば実施	▶島根県内の高校との高大連携を積極的に進めており、関係が強化している高校とは連携協定を結んでいる （例）「ゼミ開放事業」（県立大社高校、平田高校）、「学生と高校生協働によるフィールドワーク」（県立平田高校、隠岐島前高校、松江農林高校）、「協働による地域課題解決型探究学習の実施」（県立松江南高校、学校法人大多学園）など	▶高大連携モデル校（7校）と、以下の取り組みを行っている。 ①教員間の意見交換・授業参観 ②双方の教員が授業に参加 ③高校生・学生間の交流 ④高大接続・初年次教育用の補助教材の開発についての検討 （2019年度実施例）熊本北高校のSSH事業「有明海干潟実習」に講師派遣、八代中学校の生徒を対象とする大学訪問受け入れ（模擬授業・施設見学）など

*2020年8月時点。最新の情報は各大学のWebサイト等をご確認ください

入試は一番関心が高く、中でも多面的に評価する年内入試は、その大学の教育の特徴を伝える一番の広報材料だ。一方、受験そのものに手間がかかる年内入試の場合、入試要項だけではその意図は伝わりにくい。そのため掲載大学の多くは、入試に絡んだ高大接続のプログラムを実施したり、入試そのものがその大学の教育を体現する内容になっていたりする。一部の大学については、P.20からの大学事例で詳細を掲載している。

コロナ禍対応

免除や代替だけでなく新方式の追加も

国立大学協会、公立大学協会は、共通テストに特例追試験が設けられたことを受け、追試験受験者については合格発表の期日を6日間、入学手続きの期日を4日間、後ろ倒しにすると発表している。

今回取り上げた15大学の対応を類型化してみると、入試日程の変更のほか、「対面で行う予定だった面接等の試験を中止、もしくはオンライン実施、書類等で代替」（滋賀大学、桜美林大学、東北福祉大学など）、「英語の資格・検定試験の成績提出を除外、もしくは他の試験、書類等で代替」（金沢大学、島根大学、三重県立看護大学、県立広島大学など）、「活動実績について（一部）報告を除外、あるいは他の試験・書類等で代替」（島根県立大学、熊本県立大学など）、「新たな入試方式を追加」（聖学院大学など）がある。表では取り上げていないが、大正大学は、年内入試に対面式のほかオンライン式も導入、募集人員や選抜方法も分けて実施すると言う。コロナ禍は、今までの入試の当たり前を見直すチャンスと言える。

入学前教育

意欲醸成、個別指導：入学前から大学教育

入学までの「穴埋め」ではなく、大学での学びにつながる教育を整える大学が増えつつある。滋賀大学は、入学予定者と在学生が反転授業に取り組む「高大コラボゼミ」を実施。聖学院大学は、合格者同士との交流や大学教育への興味喚起を目的としたプログラムを設けている。小樽商科大学の「ギャップイヤープログラム」は「グローバル総合入試」合格者のうち数人に対し入学を1年猶予し、その間の海外留学をあっせんする。

また、多様な学生の受け入れに合わせ、個別対応も進む。表では

*2020年8月時点。最新の情報は各大学のWebサイト等をご確認ください

編集部が注目した年内入試【私立大学】

	東北福祉大学	桜美林大学	城西大学	聖学院大学	高崎商科大学
年内入試比率 （年内入試募集人員／全募集人員）	570人／1300人（44％）	1345人／2520人（53％）	758人／1660人（46％）	231人／540人（43％）※2020年度	95人／200人（48％）※短期大学部は除く
注目の年内入試	学校推薦型選抜 高大連携* ▶実施学部：全学部（27人） ▶出願条件：同大実施の「高大連携プログラム」に参加し修了した生徒 ▶選抜方法：①書類審査（推薦書、調査書、志望理由書、活動報告書）〈100点〉 ②小論文（テーマ型、または課題文提示型。学科による）〈100点〉 ③面接（2対1、15分）〈50点〉 総合型選抜Ⅰ期・Ⅱ期（Ⅰ期：118人、Ⅱ期：56人） ▶実施学部：全学部 ▶出願条件：第一希望者 ▶選抜方法：＜第一次選考＞①書類審査（調査書、志望理由書、活動報告書）〈100点〉 ②学力検査50点×2科目〈100点〉 ③面接（2対1、20分）〈100点〉 ＜第二次選考＞①各学科選考（系列の福祉施設での一泊二日の体験実習や課題レポート提出等）〈100点〉 ②プレゼンやディスカッション等〈100点〉 ③面接（2対1。口頭試問含む）〈100点〉	総合型選抜第1・2回 ▶実施学部：全学部（752人） ▶選抜方法：＜一次審査＞①入学志願者調査（読んだ本について等） ②自己申告書 ③活動報告書 ④志願者評価書 ⑤調査書等 ＜二次審査＞2対1の面接（志望動機、提出書類、課題図書について）等（芸術文化学群は実技審査等） ▶出願方式：専願・併願があり、併願は他大学へ志願することも可能。所定の期間内に入学手続きを行った者については、本学への入学資格を有しながら、他大学の総合型や学校推薦型選抜、一般選抜、大学入学共通テスト利用選抜にチャレンジすることができる	総合型選抜A・B日程 ▶実施学部：＜A日程＞全学部全学科（76人） ＜B日程＞経済、現代政策、経営、理（化）、薬（32人） ▶選抜方法：＜一次審査＞エントリーシート、志願理由書、調査書の他、学科によっては資料、課題レポートによる書類審査 ＜二次審査＞エントリーシートや一次審査後に渡される課題に基づく面接審査（口頭試問、プレゼンテーション含む）、学科によっては基礎学力試験を課す ▶出願方式：自由応募方式 学校推薦型選抜A・B日程 ▶実施学部：＜A日程＞全学部全学科（399人） ＜B日程＞経済、現代政策、経営、理（化）、薬（43人） ▶出願条件：指定校制（専願） ▶選抜方法：面接審査（口頭試問含む）および書類審査	総合型選抜（105人） 「高大接続教育」の意義を体現する入試。受験生との「対話」をさまざまな形で実施。受験生本人が記載する書類として、大学独自の「自己カATALOG」（高校生生活記録／大学生生活計画書）を面接で利用 【課題解決入試】日頃の勉学に対する姿勢を評価 ▶選抜方法：2方式で実施 ＜講義方式＞①講義ノート〈50点〉 ②発表〈50点〉 ③面接〈100点〉 ＜小論文方式＞①小論文〈100点〉 ②面接〈100点〉 【アンバサダー入試】大学に進学することの意味を受験生と共に考える。そのうえで本学入学後に「アンバサダー（代表）」的な存在となる受験生を求める入試。試験だけでなく、出願までの情報提供や相談などのコミュニケーションを通して受験生と大学の「相性」を評価確認する ▶選抜方法：①グループディスカッション（テーマは事前に提示）〈100点〉 ②面接〈100点〉	総合型選抜 探究・ブレインストーミング型 ブレインストーミングを用いて主体性を評価。企業と共同開発 ▶実施学科：経営（総合型選抜 面接型と合わせて10人） ▶選抜方法：①ブレインストーミングプログラム ②読解力と数理解解を測るペーパーテスト ③集団面接 ④調査書 学校推薦型選抜 HaulーA特待生推薦 大学と協定を結ぶ商業科を擁する高校に対し、高校～大学の7年間で職業会計人を育てる高大連携プログラムを提供。このプログラムの受講者を対象とした入試。授業料の全額または半額を免除 ▶実施学科：会計（若干名） ▶出願条件：「高大連携HaulーAプロジェクト」に参加。日商簿記検定1、2級等に合格。入学後、会計プロフェッショナルコースを受講等 ▶選抜方法：学校の推薦書、調査書、志望理由書などの書類選考
コロナ禍対応 （感染予防、学習の遅れ等）	▶学校推薦型選抜「高大連携」の出願条件である「東北福祉大学 高大連携プログラム」はオンラインで実施 ▶入試日程の変更（総合型選抜Ⅰ期後ろ倒し） ▶総合型選抜（第二次選考）の体験実習を課題レポート提出および事例解釈・事例考察レポート作成に変更	▶高大連携プログラム「ディスカバ!」はオンラインで実施、これまでに40を超えるプログラム配信 ▶年内入試の二次審査は原則、オンラインで実施（9月入学者の入試を6月にオンラインで実施し、問題なく実施できたことから）	▶総合型選抜A日程エントリー期間の後ろ倒し ▶感染防止対策を徹底し、面接審査を実施予定 ▶総合型選抜で、薬学部薬学科では基礎学力試験を二次審査で実施、薬学部薬科学科では、基礎学力試験から口頭試問へ変更	▶密にならない入試方式として、課題解決入試に小論文方式を導入 ▶アンバサダー入試で実施を予定していたオープンキャンパス時の「ワークショップ」とその後の「事前相談」を取りやめ、出願前の相談を電話・メール・LINEチャットで受け付け ▶オンライン説明会等で受験生とコミュニケーションを図る。質問の多い項目には「FAQ集」を作成し、配信する	▶個別試験は、原則ソーシャルディスタンスはじめ安全性を保ったうえで対面で行う。遠隔地の受験生対応は、オンラインによる面接を検討中。推薦Ⅰ期でコロナにかかってしまった人をⅡ期で受け付ける、などの配慮を行うことを検討中
入学前教育 （内容と担当部署）	▶全ての入試の入学予定者を対象に、学科ごとの課題レポートを実施（現在入学前教育の個別指導化を検討中） ▶担当：学部学科や入学センター、教務部と連携	▶リベラルアーツ学群：人文・社会・自然の3つの分野から教材を一つ選択し、思考力を高め、大学教育の準備を行う受益者負担の入学前教育実施 ▶その他の学群：5教科の復習ドリル「さくドリル」 ▶担当：入学部	▶入学予定者を対象に入学前プログラムを実施 ▶薬学部医療栄養学科：化学と生物の基礎が学べる市販の入学前教育プログラムや大学オリジナル課題、読書感想文を課す ▶担当：各学部学科で担当	▶合格者同士の交流などを行う「全学プログラム」、大学教育の魅力伝える「学科プログラム」、基礎学力の定着を図る「eラーニング」を実施 ▶担当：基礎総合教育部会。職員がタスクフォースで協働する	▶経営学科：5教科の復習ドリルを複数用意し、合格者が選択。その他、入学後の抱負に関するエッセイ（600字程度）の提出やスクーリングを実施。教務委員会が担当。加えて2020年度は、ブレインストーミング体験の提供を検討中 ▶会計学科：経営学科と同内容（ブレインストーミング体験除く）に加え、簿記・会計の理解度、習熟度に応じたWeb教材および答案練習問題を提供。入学後に確認テストを実施 ▶担当：教務委員会および高崎商科大学経理研究所
入学後の特徴的な教育	▶初年次教育は、問題解決型学習を視野に置き、1年次からゼミ（リエゾンゼミ）を設け、さらに、在学生のティーチング・アシスタント、ピアメンターなどにより、学習相談から生活相談などを実施 ▶初年次教育は、学部学科や教務部、入学センターと連携	▶学群制：日本の私立大学として初めて学群制という教育システムを導入。隣接する学問領域を学生一人ひとりの興味関心に合わせて、主体的に学ぶことのできる制度を採用 ▶サービ斯拉ーニング：地域社会のニーズに基づき、学生が大学の授業で学んだことを地域貢献活動を通して特定のコミュニティに還元していく学習体験活動を展開	【薬学部医療栄養学科】 ▶化学・生物を基礎から学ぶリメディアル講義を実施。専門科目に対する不安を軽減 ▶Web学習教材を活用した自習で、疑問について自ら解決する力を高める	▶連携協定を結んでいる岩手県釜石市への派遣などのボランティア活動 ▶「地元学」「宮内地域学」「釜石学」「埼玉学」「地域と芸術文化」等、地域に密着した科目を設置。初年次教育は、全学共通科目と各学科で実施	▶探究・ブレインストーミング型：授業内のALやPBL、企業連携教育「3.5本の矢プロジェクト」等でブレインストーミングを実践する。教員は事前に、その手法を学ぶワークショップを受講している。FD／SD委員会による実施を、広報・入試室が支援 ▶HaulーA特待生推薦：公認会計士や税理士資格の取得をめざす、「会計プロフェッショナルコース」を提供
高大連携の取り組み	▶東北福祉大学高大連携プログラム：各学科の専門分野の教育を体験（ガイダンス、模擬講義、課題レポート作成、グループワーク等）し、大学への理解を深め、高大接続（連携）を強化するプログラム。終了後は、成果を高校等にフィードバックし、その後の学習活動や進路指導へ活用。プログラム修了者には「修了証」を発行、高3生には「高大連携」入試の出願資格を授与。修了者は入学者選抜の志望理由書や活動報告書への利用が可能 ▶包括連携協力協定校：宮城県教育委員会および県内5校と協定を結び、学習支援や入学者の選考方法等の研究を実施 ▶「総合的な学習の時間」に対するプログラム：県内の普通科の「総合的な学習の時間」および専門・総合学科の学習の一環として、各学科の学びを体験（模擬講義・実習等）。今後は包括連携協力協定の締結を検討 ▶アカデミック・インターンシップ：高校生が大学の希望する学びの分野を体験（ゼミ活動への参加等）するプログラム	▶高大連携プログラム「ディスカバ!」：高校生のためのキャリア支援プロジェクト。1年生から参加可能。通年開催。英語、SDGs、心理、音楽、航空など、年間約40のプロジェクトを提供。高校生は任意のプロジェクトに参加し、在学生のサポートの下、ワークショップ形式で探究。本年はオンライン開催。参加者には参加証を授与。参加証は、総合型選抜の活動報告書への活用も可能。高校生から提案された企画を実施するマイプロジェクトもあり。個人参加のほか、高校単位で参加する連携高校制度もあり ▶総合・推薦型入試準備セミナー：これまでに得た学びや経験を洗い出し、大学での学びや活動につながるための情報整理をサポートし、言語化していく。7、8月はオンライン開催	▶オンラインによる学科説明会および総合型選抜説明会の実施 ▶県内公・私立高校との包括連携協力協定締結 ▶高校への出張講義を実施 【薬学部医療栄養学科】 ▶栄養に関わる出張講義を実施 ▶入学後、化学と生物の課題試験を実施し、リメディアル講義に活用	▶入試に関する質問をLINEチャットで受け付け ▶人文学部主催で「高校生ビブリオバトル・ワークショップ」を開催 ▶近隣の高校と提携し（児童学科と心理福祉学科）、高校生が大学の授業を体験 ▶「グローバルキャンプ」を開催し、高校生や入学予定者にも参加を募集 ▶日本化学科設置科目「地域と芸術文化（盆栽文化）」への参加を県内の高校生にも募集	▶高校生に向けて、ブレインストーミングの体験ワークショップを実施 ▶探究教育、ブレインストーミング等に関心を持つ高校教員に向けて、セミナー、ワークショップ等のイベントを実施 ▶商業高校を中心とした全国40高校、および4つの高校団体と協定を締結。Web講義、セミナー、合宿などで段階的に簿記会計を学び日商簿記1級取得をめざす「高大連携HaulーAプロジェクト」を実施

取り上げているが、例えば徳島大学は、学習歴に偏りが生じがちな科目について入学前教育をWeb上で展開、小テスト、質問を送れるレポート機能、映像教材などを提供している。一方、入学前教育を入学予定者のデータ収集にも活用しているのが高知大学だ。「高知大学入学前model早期合格者学習支援システム」によりコースごとの課題を提供。取り組みデータを取得し、入学後の指導や入試の改善に役立てている。

入試と教育の連携

改革総合支援事業の評価項目としても登場

独自の観点で評価を行う年内入試で話題をつくれたとしても、そこで評価した力を伸ばす教育プログラムが入学後に用意されていなければ看板倒れだ。例えば、高崎商科大学では、教育改革を先に行い、その教育の特徴を高校や高校生に広める手段として、入試改革を行っている。また、金沢大学の「KUGS特別入試」の評価基準は、学部生が取るべき行動、身に付けるべき力をまとめたKUGS（金沢大学「グローバル」スタンダード）に基づいており、入試と教育の一貫性が高いと言える。

ちなみに私立大学の場合は、2020年度の私立大学等改革総合支援事業タイプ1において、「入試で多面的・総合的評価を行い、評価した能力を伸ばすための初年次教育等を行っているか」が評価項目になっている。

高大連携

探究学習の支援を通じた連携が盛ん

いわゆる「出前講義」のような単発の連携だけでなく、自学の学びへの接続を視野に入れた継続的な連携も増えてきている。

活発なのが、探究学習の支援等を通じた連携だ。高校単位で連携を行うのは島根大学、島根県立大学、熊本県立大学など。教員や学生を派遣したり生徒を大学に招いたりして、探究活動や進路研究をサポートしている。一方、電気通信大学、金沢大学、東北福祉大学、桜美林大学などは、在籍高校を問わず参加できるワークショップ等を大学が開講。参加歴を活動実績として入試に使える大学もある。

専門課程との学びの接続を重視し、専門高校枠を設ける大学もある。進学率に伸びしろがある専門高校に対し、高等教育への門戸を開く取り組みであるとも言える。

*東北福祉大学の「高大連携入試」についての詳細は、Between情報サイト(<http://between.shinken-ad.co.jp/>)で紹介している。「年内入試の動向②大学教育を先取りする入試ー東北福祉大学」

【図表2】年内入試の進路指導スケジュール

学 年	高 1	高 2	高 3
指導や活動	文理選択	志望校群や入試方式決定	受験校決定→年内入試出願
	・探究学習等の中で、自分の活動を記録し始め、振り返る ・自分の資質・能力や興味関心に合った進路を考え始める	・志望理由書を書き始める ・志望校を決める ・志望大学群を考える ・志望学問系統を考える	・受験者を対象とした高大接続プログラムへの参加など ・面接や小論文の練習 ・受験校を固め、志望理由を磨く

*今回本誌で取材した、探究学習や年内入試の指導に熱心な高校(P.14～)の例を基に作成

【図表3】接続重視の入試と広報のポイント

	接続重視の入試ポイント	広報ポイント
進路指導	▶その生徒に合った入試を見極めて勧める →低学年のうちからじっくりと自分に合った進学先を検討、見極める	▶低学年からのアプローチ ▶高校教員に比重を置き、教育を軸としたコミュニケーション
入試で何を問うか	▶探究学習や課題研究などから見える学力の3要素、資質・能力を見る。調査書、活動報告書	▶大学の教育の中身重視の情報発信 ▶高校との教育連携
入試の情報	▶獲得したい学生像と評価基準が明瞭。 なぜ合格／不合格なのかわかる	▶明確なAPと連動した入試制度、評価ポイントの情報開示やフィードバック

成、面接指導に入っていきます。

注意したいのは、本年度から総合型選抜の合格発表が11月以降となった点です。後ろ倒しになったことで「総合型で不合格なら、一般に切り替える」という受験戦略はリスクが高くなりました。高校は合格可能性を高めるために、より早い段階から生徒に志望校とその受験方式を見極めさせ、対策も早期化させると考えられます。

**丁寧な情報提供が
自学のファンをつくる**

このように年内入試の状況が変わる中で、今後、大学には「お互いの安心につながるコミュニケーション」が求められるでしょう。

高校教員は基本的に生徒の希望を尊重します。独自性の高い、新しい総合型選抜を生徒が望んだ場合、二人三脚で指導する教員には大きなプレッシャーがかかるはずです。前向きに取り組んでもらうためには、その入試で期待する学生像や評価の観点を、きちんと情報提供する必要があります。

指定校推薦も同様です。早期に進学先が決まるこの入試方式は、高校・大学双方にメリットがありますが、評価基準がブラックボックス化しがちで、ミスマッチが起

こることもありました。信頼関係のうえに成り立つ入試だからこそ、「推薦してほしい生徒像」を具体的に示すべきです。

今、入試は「選抜」から「接続」重視への転換が求められています。可否を振り分けるだけでは接続にはなり得ません。例えば、結果に関して「生徒のこの部分を評価した」「この点は合格レベルに達していなかった」というフィードバックをすることで、高校教員に「自学が求める資質・能力」を具体的に伝えることができます。それは高校の教育改善に生かされ、結果的に次年度以降、より自学に合った生徒が推薦されることにつながります。このように安心して生徒を送り出し、受け入れるための関係性づくりは、自学のファンづくりには欠かせません。

本年度はコロナ禍により、年内入試でよく評価される部活の成果を測る大会や検定試験の多くが中止になりました。見方を変えようと、部活や大会頼みではなく、探究活動など、高校生の日頃の学びの成果にフォーカスした入試こそ、より本質的な高大接続なのかもしれません。次ページからは、年内入試の指導に熱心な高校教員の声をご紹介します。ぜひ参考になさってください。

年内入試は高校教員と生徒の二人三脚

安心して生徒を任せ、受け入れる
「安心コミュニケーション」を

年内入試積極活用の
流れが拡大

かつて年内入試は、進学校からは「一般入試からの逃げ」と見られており、進路多様校でも「学力に不安がある生徒に一般入試を回避させる手段」とされるような消極的な活用がめだっていました。しかし最近、年内入試をポジティブに捉える高校が増えています。

背景にあるのは、入試改革の進展です。多面的・総合的評価の推進によって、国公立大学では年内

入試の定員枠が広がりました。加えて、探究学習に熱心に取り組む高校が増えています。高校側からは、「意欲の高い生徒が、探究学習等の成果を使って、志望大に進学できるのではないか」という期待が高まっています。特に専門高校からの期待は顕著です。専門高校にはレベルの高い課題研究に取り組んでいる生徒がいるため、大学にとって専門性の高い学生を獲得できるチャンスだと言えます。

さらに本年度は、コロナ禍の影響で、授業に遅れが出ています。

安全志向により年内入試を選ぶ受験生の増加が見込まれます。

**高2の時点で志望校決定
指導は早期化へ**

高校側から見た年内入試の特徴をあらためて整理してみましょう【図表1】。年内入試と一般入試の違いは教員の関与度です。年内入試は一般入試と比べて、推薦書の作成、志望理由書の添削、模擬面接など、さまざまな教員のサポートが必要のため、生徒と教員が二人三脚で臨む入試です。そのため、教員が指導に迷うような入試、情報が乏しい入試は、どれだけ特色を出しても、生徒に勧めてもらえない可能性があります。

年内入試の進路指導スケジュールも確認しておきましょう【図表2】。高2の冬休み明けに一般入

【図表1】高校から見た一般入試と年内入試の違い

	一般入試	年内入試
評価	・偏差値に応じた教科学力	・教科学力「+α」。大学によりさまざま
対策	・生徒1人でも参考書、問題集を使って可能	・高校教員と二人三脚で行う ・高校の推薦が必要な場合も
指導	・模試の結果を参考にしながら明確な指導が可能	・情報が乏しい入試は受験を勧めない ・大学のポリシーや教育内容を重視した個別指導 ・低学年から始める高校も

試と年内入試のどちらで受験するのかを検討させ、このタイミングで志望理由書を書かせる高校も多いようです。高3になると志望校を念頭に置いた志望理由書の作

REPORT



高校から見た年内入試

年内入試の目利きに聞く！



佐々木 悠俊

(株)進研アドマーケティング戦略部
チーフランナー

ささきゆうしゅん ●2012年(株)進研アド入社。首都圏エリア、関西エリアの大学支援を担当。2016年(株)ベネッセコーポレーション高校事業部にて、学習・探究・進路研究などの支援を行う。2019年より現職。



岡山県立瀬戸高校

▶設立：1909年 ▶種別：全日制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年 約160人 ▶校訓は「尚学・自主・健康・協調」
▶イノベーションを起こす「エージェンシー」（責任を持って社会変革を実現する力）の育成をめざす
▶卒業生の進路状況 大学・短大…91％、専門学校…7％、就職・公務員…2％

3年間を通じて、探究学習を実施

「生徒の夢をつぶさない」ことを進路指導では大切にしています。年内入試は、学力だけでは合格が微妙な第1志望の大学に、大学で伸びる力となる経験や意欲などを含めた「学力＋α」の力で挑戦できる入試です。生徒の夢を実現する手段として、私の学年では年内入試の受験を生徒に積極的に勧めました。

年内入試に必要な学力以外の「＋α」の力を育てるため、本校では探究学習に力を入れています。

本校の探究学習*は、3年間を通したプログラムです。1、2年次には、グループでの課題研究を3回実施します。その中で生徒は、社会への問題意識を深め、行動力や表現力などを身に付けます。3年の1学期には、進学や就職に向けて、志望理由書などの作成に取り組みます。その中で生徒は、自分の志望を言語化します。

これらの活動は、教員にとっても生徒理解を深める機会になっています。課題研究の指導を通して教員は、「この生徒はグループワークでリーダーシップが取れる」「この生徒はプレゼンテーションが得意」など、それぞれの生徒の特性を把握します。これを基に、高2・2月に学年で進路検討会を開き、生徒の強みが最大限発揮されるのは年内入試か、それとも一般選抜かといった大まかな受験戦略を検討します。また、志望理由書などを教員が添削する中で、志望の軸となる生徒のキャリアプランを両者で共有します。ここでの意思疎通は、それ以降の

*瀬戸高校の探究学習については32ページで詳しく紹介しています

年内入試の 進学実績（2019年）	国公立大／岡山大学、広島大学、山口大学、島根大学、香川大学、愛媛大学、信州大学、岡山県立大学など 私立大／立命館大学、就実大学、岡山理科大学、川崎医療福祉大学、ノートルダム清心女子大学など
----------------------	---

	高1	高2	高3			
	4月～ 志望や行動力などを育成	2月 生徒一人ひとりについて 受験戦略を検討	4月 進路希望調査 ・志望理由書などの作成 (全生徒対象)	6月 生徒の受験指導の 方向性を確認・決定	7月～ ・年内入試希望者の面接、 小論文指導を開始	1月 ・高校学習の集大成として 共通テストを受験
年内入試 指導スケジュール (受験校の決定 ～受験対策)						
年内入試 指導のポイント	▶探究学習等の活動をベースに生徒一人ひとりの受験戦略を検討。個別進路相談も随時実施 ▶志望理由書の作成指導を通して、生徒のキャリアプランを生徒と教員で共有					
大学への期待	年内入試	▶年内入試は学力＋α。「α＝大学で伸びる力」だと捉え、その力を入試でしっかり評価してほしい ▶生徒のどこを見ているのか、評価の観点などを示してほしい				
	高大接続	▶生徒にリアルな大学の雰囲気、生の講義を体験させたい ▶生徒の志望は「学問」が切り口。「大学」ではなく学会など「学問」で情報提供を				
	情報提供	▶「合格者のどこを評価したのか」「不合格者はどこが足りていなかったのか」などのフィードバック ▶指導の参考にするため、面接の質問内容やグループ討議等のテーマを公表してほしい				

取材・文／本間学 撮影／木村琢磨



川崎市立高津高校

▶設立：1928年 ▶種別：全日制・定時制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年約280人
▶川崎市北部唯一の市立高等学校。「学ぶ力」「自律する力」「実践する力」の3つの力を養成。2019年度入学生より1人1台のタブレットPCを導入。▶卒業生の進路状況 大学・短大…65％、専門学校…25％、就職・その他…10％

「身の丈に合った大学」を選ぶ生徒が増加

本校ではここ数年、年内入試を希望する生徒が増え、2020年度入試では大学進学者の約7割が年内入試で進学しました。評定平均4.3以上の生徒の変化が顕著です。ここ2年で、指定校推薦での進学が急増しました(2018年度44％→2019年度57％→2020年度72％)。

この背景には中堅私大の難化があります。合格率が半減し、部活引退後にがんばって勉強すれば合格できるモデルが崩れたのです。生徒の意識も変わりました。難度の高い大学よりも、「入りやすい、身の丈に合った大学」に重きを置きます。さらに保護者も安全志向で指定校を望みます。

しかし、このような安易な大学選びはミスマッチにつながりかねません。よって本校では指定校推薦希望者には明確な志望理由を求め、面接指導は4回以上、合格後は検定受験など、高いハードルを設けています。

「求める学生像」が透けて見える入試を期待

「入れるのならどこでもいい」志向の生徒が増える中、進路指導の一番の課題は、「自分の将来に向き合わせる」こと。その手段として志望理由書の作成と面接指導に力を入れています。まず、高2・12月に全生徒に志望理由書対策講座を受けてもらいます。「将来つきたい職業は?」「そう思ったきっかけは?」「入学後何を学びたい?」「魅力に感じた志望校の特色は?」など、小さな質問に答え、それらを最後に合体させて志望理由書をつくるというものです。この作

業を通して生徒は、何が自分の課題なのかに気づき、調べたり考えたりしていきます。年内入試受験者には高3の5、6月に再び志望理由書を書かせ、志望理由を確認します。また、高2・2月には卒業生に、学問分野別に大学でのリアルな学びについて話してもらう会を設けています。生徒にとって卒業生の話は宝の山。具体的、かつ説得力があるので、ミスマッチを防ぐことにもつながっています。

面接指導は、高3・7月～11月にかけて1人あたり5、6回しています。ここでも短い質問を重ねることで、生徒は徐々に自分の考えが明確になり、回答の質もぐんと上がります。このように一連の年内入試対策を続けるうちに、生徒は自分の将来について向き合うようになり、考えが深まっていくのです。年内入試対策はキャリア教育とも言えます。

私が思ういい年内入試とは、その大学への適性を見極めるような、ある程度歯ごたえのある入試です。例えば**産業能率大学**のキャリア教育接続方式。インタビューやグループワークなどを行う3日間のプログラム受講が必須です。これをやり遂げられなければ、この大学の教育は合わないことがわかります。あるいは**日本女子大学**の自己推薦入試。ある生徒は課題論文の「平賀源内の浄瑠璃」がきっかけで、評論についての自分の適性に目覚めました。このような、求める学生像が透けて見える入試は、受験生、大学双方にプラスになるはずで、本校ではこれからキャリア教育に本格的に取り組みます。大学の先生や院生の皆さんも参画してみませんか。生徒の成長、変容と一緒に見守ることは、長い目で見て大学にもメリットがあると思います。

年内入試の 進学実績（2019年）	国公立大／信州大学 私立大／神奈川大学、専修大学、日本大学、駒澤大学、帝京大学、関東学院大学、東海大学、國學院大學、東京工科大学、明星大学、麻布大学、日本体育大学、鎌倉女子大学など
----------------------	--

	高2	高3
	12月 志望理由書対策講座 (全生徒対象) ▶志望理由書作成 2月 ・卒業生12人による、 学問説明会 (大学に進学した卒業生に聞く会)開催	4月 進路希望調査 ▶進路希望調査 5月 年内入試希望者説明会 (第1回) ▶年内入試希望者説明会 7月 年内入試希望者説明会 (第2回) ▶年内入試希望者説明会 9月 学校推薦型選抜希望調査 (第3回) ▶学校推薦型選抜希望者の面接練習 10月 学校推薦型選抜受験 ▶学校推薦型選抜受験 12～3月 年内入試合格者向けに、 各種資格検定試験の 取得を促す
年内入試 指導スケジュール (受験校の決定 ～受験対策)		
年内入試 指導のポイント	▶志望理由書作成指導や面接指導を繰り返す中で、将来のビジョンや大学進学についての考えを明確にする ▶大学に進学した卒業生を招き、大学での学びを紹介。学部・学科のミスマッチを防止する ▶指定校推薦希望者には、志望理由の明確化などハードルを設け、安易な推薦はしない	
大学への期待	年内入試	▶アドミッション・ポリシーが反映された、受験生の適性をきちんと評価する入試 ▶ある程度の歯ごたえ、ボリュームのある課題を求める入試
	高大接続	▶次年度から学校設定科目「キャリア」を設置する予定。探究学習や「キャリア」の授業で、大学の教員や大学院生に評価やアドバイスしてほしい。定期的な連携の機会を持ちたい
	情報提供	▶高校生向けの「研究室ガイド」「ゼミガイド」の提供。生徒が興味を持った分野、テーマについて研究している教員がいるかどうか調べることができる資料が欲しい

取材・文／本間学 撮影／荒川潤



熊本県立熊本西高校

▶設立：1974年 ▶種別：全日制／普通科、普通科体育コース、サイエンス情報科／共学 ▶生徒数：1学年約360人
▶2018年度より教育、募集、校務等あらゆる活動が対象の学校改革がスタート。大学や企業との連携が進む。
▶卒業生の進路状況 大学・短大・準大…61%、高専…6%、専門学校…26%、就職・その他…7%

年内入試活用へ指導方針を転換

本校では、2019年度から年内入試を適切に利用するように、進路指導の方針を転換しました。それまでは生徒の学力を最後まで伸ばして、一般入試で偏差値上位の大学に挑戦することを生徒に勧めていました。しかし、受験生の安全志向などにより、本校の生徒がこれまで合格していた大学の合格ラインが上昇し、不合格となるケースがめだってきました。学力勝負にこだわっている、生徒の志望は実現できません。そこで、総合的な力を評価する年内入試の活用の方針を転換したのです。その結果、2019年度卒業生は、国公立大進学者16人中15人が、私立大進学者も6割以上が年内入試で合格しました。

年内入試の指導で一番重視しているのが、志望理由書の作成です。生徒には、大学のアドミッション・ポリシーをきちんと読み砕いて、自分の言葉で志望理由を書くように指導しています。しかし、例えば大学で、「なぜ、コミュニケーション力が求められるのか」「なぜ、チームワークが必要なのか」を問うと、答えに詰まる生徒が少なくありません。コミュニケーションというと、友達とよく話をする程度にしか考えていないのです。そこで、生徒が志望理由をしっかりと考える時間を確保するために、これまで3年で行っていた受験校決定のための三者面談を前倒しし、高2の12月に実施するように本年度の3年生から変更しました。

担任の教員に対しても、調査書を作成する際は大学のアドミッション・ポリシーをふまえるように話しています。2021年度入試より、調査書の両面1枚までの制限がなくなりました。そこで、大学の入試担当者に、調査書の活用方法を聞いて回りました。その結果わかったことは、大学が調査書に求めているのは「量」ではなく「質」だということです。募集要項の内容をよく確認するなどして、大学が求めていることを的確に把握し、生徒のよさを簡潔に伝えられるように、われわれも努めていきます。

アカデミック・インターンシップで変わる生徒

受験指導の中だけで、生徒の志望理由書のレベルを引き上げていくのには限界があります。そこで、1年次に大学や専門学校で授業や実習に臨むアカデミック・インターンシップ「NAIS」*を、今の3年生から立ち上げました。初年度は希望者のみでしたが、翌年度からは全員参加に切り替えました。5日間連続で本校の生徒向けに授業を行ってもらい、受け入れ先の大学・専門学校には大きな負担をかけたと思います。しかし、「授業を聞く態度が変わった」「日誌に書く内容が変わった」など、目に見えて生徒の様子が変わりました。将来の学びを体験することで、今の自分に足りない課題を実感したからです。

大学や専門学校には、生徒の志望意欲を育てる高校の取り組みに、ぜひ協力していただきたい。将来を見据えて高校でしっかりと学ぶ生徒を育てることは、大学や専門学校にとっても必ずプラスになるはずです。

将来の学びへの準備を
促すための高大連携

目利きに聞く！



進路指導主事
もり やま みき とし
森山幹俊

年内入試の 進学実績 (2019年)	国公立大／熊本大学、宮崎大学、山口大学、熊本県立大学、北九州市立大学など 私立大／西南学院大学、福岡大学、熊本学園大学、崇城大学、九州看護福祉大学など
-----------------------	--

	高1	高2	高3
	8、9月 授業、実習等 ・NAIS(大学、 専門学校で5日間の 授業、実習等)	12月 併願大を含め 受験大学を決定 ・三者面談 ・志望理由書等の作成 ・APの読み解き指導	7月～ 9月～ ・年内入試対策学習会 ・志望者の多い大学で、 週3回実施 ・早期出願の大学に 対する指導開始 ・小論文面接対策開始
年内入試 指導スケジュール (受験校の決定 ～受験対策)			
年内入試 指導のポイント	▶生徒にアドミッション・ポリシー(AP)をふまえた志望理由書作成を指導 ▶教員もAPの読み解きに力を入れ、APに沿った書類を作成する ▶高1で上級学校に触れさせ、将来のために学ぶ意識を高める		
大学への期待	年内入試	▶一般選抜と同様に学力重視になりすぎると、「大学で絶対に伸びる」と確信を得ている生徒が進学できない ▶高校と相互理解を進め、信頼できると感じた高校には積極的に指定校推薦枠を設けてほしい	
	高大接続	▶アカデミック・インターンシップの教育効果は非常に高いので、今後も連携を続けていけるよう、協力をお願いしたい	
	情報提供	▶大学が入学者に期待する資質・能力などを生徒、教員向けにしっかりと伝えてもらいたい ▶入試改革への対応などについて、腹を割って話してほしい	

*西高アカデミック・インターンシップ。本年度はコロナの影響により実施形態を変更予定

取材・文／児山雄介 撮影／福山哲



三田国際学園中学校・高校

▶設立：1902年(戸板裁縫学校として) ▶種別：全日制／普通科／共学 ▶生徒数：1学年約200人
▶2015年に共学化し、現在の校名に改称。「発想の自由人たれ」をモットーに、世界標準の教育をめざす。
▶卒業生の進路状況 大学・短大…98%(うち約10%は海外大学)、専門学校・就職等…2%

メタ認知、ストーリー化、言語化力を養う

本校の学びの大きな特徴が、“相互通行型授業”です。全授業で教員はまず“解のない問い”を投げかけ、生徒は個人やグループで仮説の構築、検証を経て、学内外での発表やレポート執筆に至ります。年内入試ではこうした探究活動で培った力が高く評価されるため、一般入試とは異なる可能性を開く手段として積極的に活用しています。

生徒は入学以来、学びの積み重ねで得た苦労、気づき、成長などを、ポートフォリオに蓄積し続けます。それを棚卸しし、自己を振り返る大きな節目が高2の冬です。ポートフォリオを基に志望理由書を作成するのです。生徒は最初から主体的に進路を選ぶことができるわけではありません。志望理由書や面接、小論文などを形にする演習を重ねることによって、次第に自分の価値基準や将来に対する軸が明確になり、それを他人の共感を呼ぶような「ストーリー」として言語化できるようになります。

総合型選抜をはじめとした年内入試は、いわば、「あなたのストーリーは何ですか?」と大学から問われているようなもの。そこに正解はありません。よって本校で行われている年内入試「対策」は、実社会と繋がり行動する中で、自己理解と現在地の把握に努め、キャリアビジョンをストーリー化するための言語化力を養うこと。他者との関わりの中で紡がれる自分なりの「解」が大切なのであって、決して学校生活を受賞歴で固めることではありません。

生徒の発想や主体的行動を促すAPを望む

このような観点からすると望ましい年内入試とは、入学後に必要な教科の知識だけでなく、大学・学部が大切にしている資質やマインドを問う入試です。例えば小論文で、医療と直接関係ない哲学的なテーマを出題する医学部、絵画の鑑賞について問うスポーツ系学部などからは、どんな人を育てたいのかが伝わってきます。

その大本となるのがアドミッション・ポリシー(AP)です。必要な経験や考え方について読む側に解釈を委ねるAPのほうが、生徒は何をすべきか自分なりに解を出し、主体的に行動しやすくなります。一般的な表現やあまりに具体的すぎるAPは、かえって生徒の主体性や発想を妨げかねません。生徒にはAPを読み込めと指導していますが、中には読み込んだ結果、魅力半減する大学もあるようです。AP＝大学や学部のストーリーとすると、大学にも言語化する力が問われているのだと思います。

年内入試は大学にとって、欲しい人材をダイレクトに採る入試です。理念さえあれば、もっと主観的な選抜方法でもいい。皆さんが考える育成ストーリーを遠慮なくぶつけてもらえれば、生徒は全力で立ち向かうでしょう。

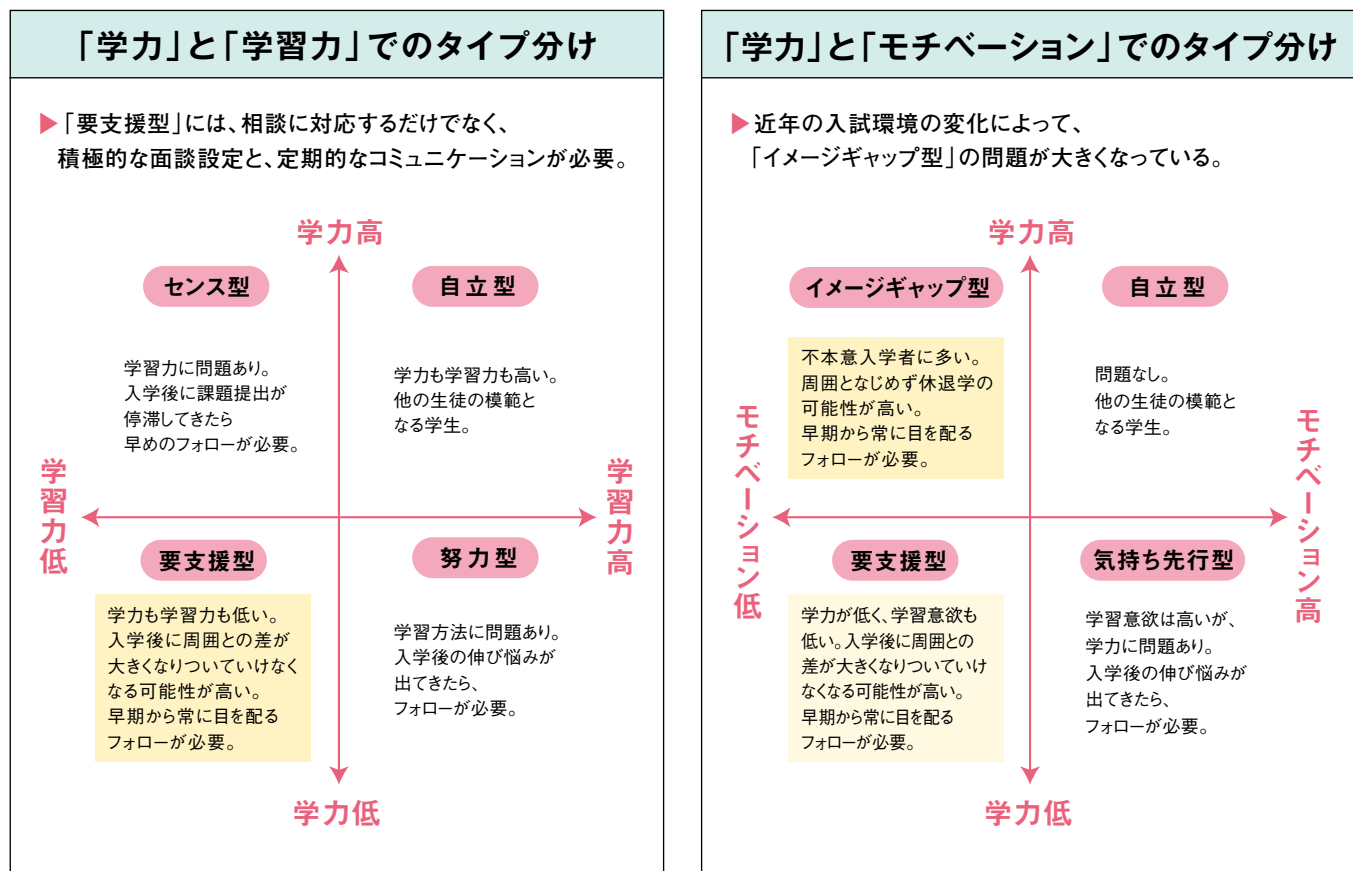
一方で大学とは、教育についてもっと対話をしたいですね。「ポートフォリオ」一つとっても、しばしばお互いの定義のずれを感じます。教育理念をオープンに話し合い、相思相愛の相手を見つけて育成をともにするところから、高大の絆が結ばれていくのではないのでしょうか。

年内入試の 進学実績 (2019年)	国公立大／お茶の水女子大学、筑波大学など 私立大／早稲田大学、慶應義塾大学、上智大学、中央大学、明治大学、立教大学など
-----------------------	--

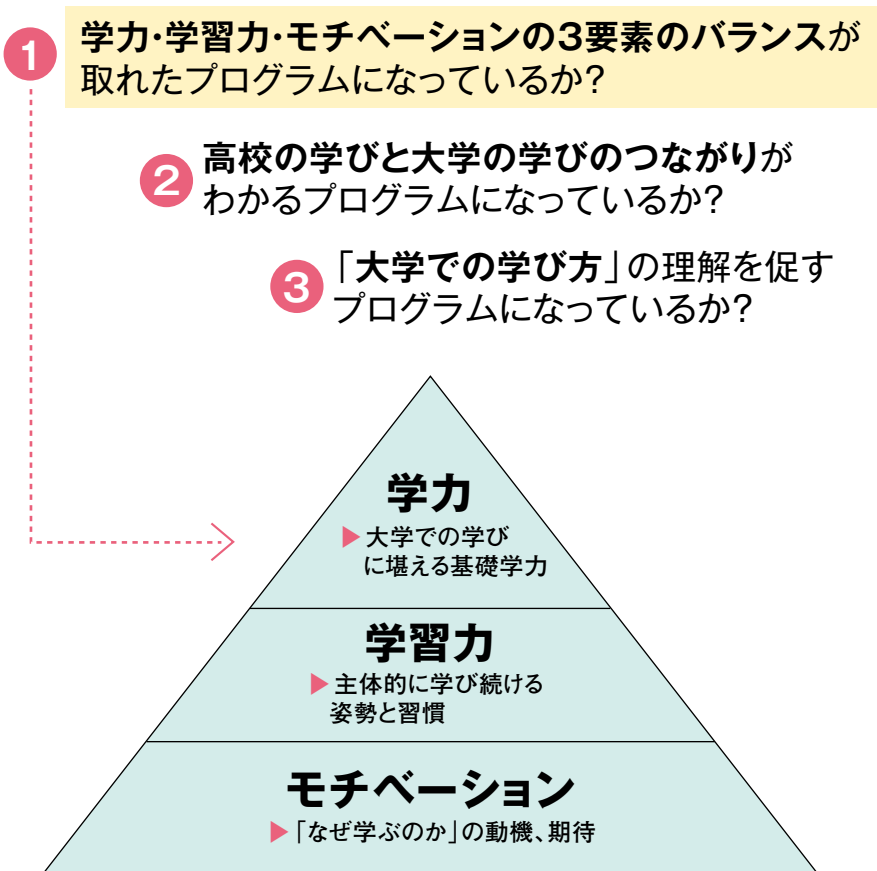
	中学校	高1	高2	高3
	中1 ポートフォリオ記録開始	5月 オリエンテーション合宿 で将来の目標を検討	7～8月 9月(～3月) 推薦入試シミュレーション ・オープンキャンパス レポート作成 ▶小論文、志望理由書 講座(希望者)	12～1月 志望校向けの 志望理由書第1稿作成 ▶3～4月 志望理由書提出(第2稿、 個別添削スタート) ▶4～7月 小論文講座(共通課題) 志望理由書個別添削 ▶8～11月 小論文講座(ハイレベル) 志望理由書個別添削 推薦入試面接練習
年内入試 指導スケジュール (受験校の決定 ～受験対策)				
年内入試 指導のポイント	▶中学校から始まるキャリア教育が起点。学びを蓄積したポートフォリオによって自己理解を促す ▶大学を「選ぶ側」に立てる入試として、年内入試を積極活用。ただし一般入試対策も並行させる ▶志望理由書や小論文の指導を重ね、キャリアをストーリー化するための言語能力を養う			
大学への期待	年内入試	▶自学のポリシーと一致した学生を採る、主観的な入試を ▶直接的な教科学力だけでなく、資質、マインドを問う選抜手法が望ましい		
	高大接続	▶「ポートフォリオ」「入試対策」などのキーワードについて、高大双方が考えを述べ合える場が欲しい ▶教育について相思相愛の学校同士が、教育プログラムを(単発ではなく)継続的に共催するのが理想		
	情報提供	▶APをはじめとする「求める人材像」は、生徒に考えさせる余地を持たせたものを ▶どんな未来をつくらうとしているのか、大学・各学部が描く「ストーリー」を示してほしい		

取材・文／児山雄介 撮影／荒川潤

【図表2】入学者のタイプ分けの例



【図表1】入学前教育の効果を高める3つのポイント



OPINION

これからの入学前教育
多様化する学生を
大学教育につなぐ

3つの
ポイント

進む学生の多様化
変わる入学前教育の役割

年内入試合格者に対する入学前教育は、文部科学省が積極的に講ずるよう求めていることもあり、今や多くの大学で実施されるようになりました。しかし、「課題への取り組みが積極的でない」「学力の向上につながらない」といったプログラムの課題だけでなく、「教職員の負担が大きい」「担当部署が定まらない」といった運営上の課題も尽きないようです。

年内入試入学者が増加するにつれ、こうした課題は一層重みを増していくことでしょう。加えて次年度、コロナの環境下で入学する新入生は、高校の授業の遅れによる学力不足、超安全志向の志望校選択や、進路・大学研究不足による不本意入学といった不安要素

のモチベーションを高めるには、②取り組み課題と大学の学びとのつながりを具体的に示すことがポイントです。そして大学における学びにスムーズに移行するためには、③大学で必要となる主体的な学び方を理解できる内容が盛り込まれていることが望ましいでしょう。

個別の学生ケアを実現する
データ取得と層別指導

より多様な学生の入学が予想される今後は、学業不振や中退を防ぐために、それぞれの学生に合ったケアと、そのための情報が必要になります。入学前教育に対する各入学者の取り組状況や課題の得点等のデータは、入学後の教育の指導材料として有用です。もちろん、各学生の特性に合わせて一人ひとりへの個別指導ができれば理想的ですが、多くの学生を抱える大学では難しいのが現状です。このジレンマを解消するには、入学者をタイプに分け、それぞれのタイプに合わせた指導を行う「層別指導」を織り交ぜることが有効です。特に注意を要する新入生のタイプに注力して、個別にケアを行えば効果的です。

入学前教育の結果を基に行うタ

(株)進研アドマーケティング室
チーフランナー
中井利明



なかいとしあき●関西エリア、首都圏エリアでの大学支援や情報誌編集を経て、2017年より現職。高大接続やグローバル人材育成の領域を中心に、大学の教育プログラム設計・広告プランニングに携わる。

取材・文／児山雄介 撮影／亀井宏昭

素を抱えている可能性があり、より丁寧な学生へのケアが求められます。このような状況下では、入学前教育を「自学の教育のスタート」と位置付け、入学後の教育へとつなげる視点を持つことが重要です。

自学の学びにスムーズにつながる効果的な入学前教育の設計ポイントを、【図表1】に3つ挙げました。まず、①学力・学習力・モチベーションのバランスです。大学での学びに堪える学力向上のためには、その土台として主体的な学びの姿勢・習慣、学習力と、学ぶ理由、大学の学びへの期待、モチベーションが必要で、特に大学受験という大きなハードルを越えた入学者には、次の目標として大学教育に向かう前向き気持ちをいかに作り出せるかが鍵になると言えます。次に、入学者予

イフ分けとして、まず考えられるのは【図表2】の左図のように「学力」と「学習力」を掛け合わせる方法です。最もケアの優先順位が高いのはどちらも低い「要支援型」の入学者。大学側から積極的にフォローを仕掛けるべき層です。

また、近年の入試環境の変化によって、これまでより学力の高い入学者が増えたという声も伺います。その場合には、横軸を「モチベーション」に変更した右図のタイプ分けを適用したほうがよいかもしれません。この場合、左下の「要支援型」だけでなく、左上の「イメージギャップ型」も注意を要すると考えられます。学力は高いがモチベーションは低い、いわゆる不本意入学者にあたる可能性があり、大学での学びや学生生活に期待を抱かせるフォローを講じたいところです。

近年、高校と大学をつなぐ育成型の入試も増えていきます。入試・入学前・入学後とバラバラだった教育を一本の線でつなげるという視点で、あらためて入学前教育を見直す好機と言えます。きちんと大学で学ぶ準備ができる入学前教育を提供することが、入学者の成長を促進するだけでなく、自学の教育力のアピールにもなるでしょう。



所在地／島根県松江市
学生数／約6000人
学部／法文、教育、人間科学、医、総合理工、生物資源科学
大学院／人間社会科学*1、教育学、医学系、自然科学
▶THE世界大学ランキング2020／総合1001+位、同日本版2020／＝81位
*1 2021年度設置予定(設置申請中)

へるん入試でつなぎ、発展させる生徒の好奇心と探究心

学びのタネ

高校	へるん入試(総合型選抜)	入学前教育	大学教育						
「学びのタネ」を見つける	「学びのタネ」を大学につなげる	「学びのタネ」を育てる							
教科の授業、探究学習や部活動などで学びのタネを見つける ◎感動 ◎違和感 ◎疑問 ◎課題意識 ◎貢献意識 など	自分を見つめ、大学を知る <table><tr><td>一般型</td><td>特定の領域・事象に対する強い好奇心と探究心重視</td><td>①調査書＋クローズアップシート(80点) ②読解・表現力試験(100点) ③志望理由書を用いた面接(100点)</td></tr><tr><td>特定型</td><td>・地域志向 ・専門高校 ・グローバル英語 ・芸術・スポーツ・技能</td><td>上記に加え、各入試別「付加評価項目」</td></tr></table>	一般型	特定の領域・事象に対する強い好奇心と探究心重視	①調査書＋クローズアップシート(80点) ②読解・表現力試験(100点) ③志望理由書を用いた面接(100点)	特定型	・地域志向 ・専門高校 ・グローバル英語 ・芸術・スポーツ・技能	上記に加え、各入試別「付加評価項目」	①アカウントを付与し、「ぶれ大学」のHP上で課題を与える ②英語のeラーニング ③1泊2日のセミナー *本年はオンライン開催の予定	各自の学びのタネに合った教員がつくフレッシュゼミナールで学びのタネをサポートする
一般型	特定の領域・事象に対する強い好奇心と探究心重視	①調査書＋クローズアップシート(80点) ②読解・表現力試験(100点) ③志望理由書を用いた面接(100点)							
特定型	・地域志向 ・専門高校 ・グローバル英語 ・芸術・スポーツ・技能	上記に加え、各入試別「付加評価項目」							

注目! Web会議を駆使して、高校と対話を重ねて理解促進

初年度の「へるん」の募集人員は全体の20%強。高校現場への早急な認知拡大が必須のため、コロナ下でもWeb会議システムを使い、積極的に広報活動をしている【右図】。各校の事情に応じた個別の情報を提供するほか、高校側の疑問にも答える。特設サイト「へるんスクエア」は高校生、高校教員への情報提供の入り口という位置付けだ。特にWeb高校訪問では多くの高校教員が参加し、一方的な情報発信になりがちリアルな高校訪問と比べて、質問が増え、意見や要望の吸い上げも容易になったという。加えてWeb会議の利点は、実際に生徒を指導する担任も参加しやすいこと。担任が「『へるん』に合いそうな生徒が実際に思い浮かぶ」ところまでアプローチができたという。



「へるん入試®」の情報を集約し、受験生に提供する「へるんスクエア」。

Webを用いた入試広報の主な取り組み

取り組み	実施時期・対象	内容
Web高校訪問	4月から実施。対象は高校教員(3年生の担任、進路指導部など)。	「へるん」に関するオンライン説明会、質疑応答を実施。Zoomやメールを活用。
へるんスクエア	全国の高校生、高校教員、保護者に向けた特設サイトを開設。	「へるん」に関する情報の入り口として設置。ホームページで入試情報、学部学科情報等を配信。
Web入試説明会	6月から説明動画を配信。対象は全国の高校教員。	前年度の入試結果報告、今後の入試広報予定、「へるん」の説明動画などを配信。学部・学科ごとに高校教員に対するオンライングループ相談会を実施。

* 島根大学のWeb広報の取り組みの詳細は、Between情報サイトで紹介している。「乗り切ろう! コロナ危機」 Web広報で高校に新入試を発信—島根大学— <http://between.shinken-ad.co.jp/hu/2020/07/shimanedai.html>

CASE STUDY

探究心・好奇心を評価し、大学教育につなげる

2021年度入試より、高校生の探究心を評価する総合型選抜を導入する島根大学。学力偏重から脱却した高大接続型の育成型入試を実施する狙いを聞く。



副学長(教育・入試改革担当) 武田信明

ただのふあき●1958年生まれ。島根大学法文学部言語文化学科教授。専門は日本近代文学。明治から平成まで、夏目漱石、太宰治、泉鏡花、江戸川乱歩から村上春樹まで幅広い作家を取り上げる。

大学で伸ばすタネを持つ学生を集めたい

大学で伸ばしたい「学びのタネ」を持つ学生を見つけない。これが、本年から始める総合型選抜「へるん入試」(以下「へるん」)の狙いです。「興味・関心」や「探究心」など、学力テストでは評価されないものを見るため、共通テストは課しません。各自の「学びのタネ」を書いた志望理由書と高校での活動を記述するクローズアップシート、調査書や面接、読解・表現力試験で評価します。「へるん」を含む年内に行う特別選抜の定員は全体の32%。将来的には段階的に40%まで広げたい考えです。

「へるん」には一般型と特定型があり、特定型は地域志向やグローバル志向、特定技能など、プラスαの力を評価するほか、専門

性の強い「学びのタネ」を持つ専門高校生向けの枠を設けます。「学びのタネ」にこだわるのは、偏差値だけで評価される世界から脱却したからです。実際に偏差値だけで本学を選び、学力だけで評価されて入学した学生の中には、法学志望なのに六法も知らないなど、学びのタネが育っていない者もいました。学内では「学力の低い層が入ってくるのではないか」との心配もありました。しかし、2016年度入試から実施したセンター試験を課さない「地域貢献人材育成入試」の入学者は、PBLでリーダーを買って出るなど意欲的な学生が多く、手応えがありました。

これまでのセンター試験中心の入試は、言わば万能型の「優秀な学生を選抜するシステム」。18歳人口が減少する中、今後同じ土俵で戦えば、「優秀な学生は、偏差値上位の大学に進むでしょう。経営的にも新たな受験者層の開拓が課題です。そこで、本学は「特定の分野で輝く学生」を獲得する方向にかじを切ったのです。

探究学習に熱心な高校の期待を受け止める

高校側からすると「へるん」は、

「探究学習でのがんばりを評価する」高大接続プログラムです。近年、地方の高校は探究学習に力を入れており、この活動を通して高校生が身につけた力を入試で評価してほしい、という高校側の期待がありました。「へるん」では調査書で生徒の探究学習をアピールしてくれらる評価します、入学前から探究で培った力を育てる手厚いサポートをします——このように訴えると高校教員はがぜん興味を持ちます。Webによる高校訪問では、「一芸」ではなく「大学で学ぶ意欲」タネを見る入試であること、そのために出願書類に具体的に何を書いてほしいのか、丁寧に説明しています。

「へるん」を成功させるには、学内の理解も必要です。学生を育てるのは一人ひとりの教員。今後の「へるん」拡大に向け、入学後の成績や意欲、学習時間等の定量的なデータと教員の実感なども組み合わせた検証結果を示し、現場の教員の心を動かしていきます。このユニークな名称「へるん」は、本学の前身尋常師範学校で講師を務めたラフカディオ・ハーン

取材・文／本間学 撮影／伊東昌信

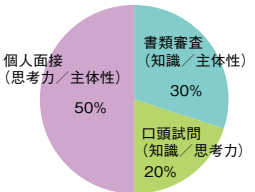
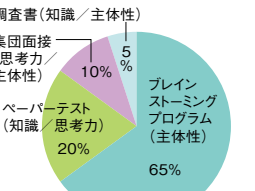


所在地／群馬県高崎市
学生数／約750人
学部／商(経営、会計)
大学院／商学
▶THE世界大学ランキング2020 日本版／201+位

高大連携から始める、これからの社会に向けた人材育成

高校のニーズ

社会のニーズ

連携の軸	高校	入試	大学
会計学科 高度会計人の育成	▶協定校に簿記・会計教育プログラムを無償で提供(オンライン講義、地域でのセミナー、大学での合宿等) ▶日商簿記1級合格をめざす	Haul-Aプロジェクト Haul-A特待生推薦 (学校推薦型選抜)  ▶4年間の授業料について ・日商簿記1級または全経簿記上級合格者は全額免除 ・日商簿記2級合格者は半額免除 ※いずれも入学金は全額免除	▶会計学科に所属 ▶経理研究所「会計プロフェッショナルコース」を受講 ▶公認会計士、税理士をめざす ▶資格を取得した卒業生が講師として指導も
経営学科 探究・プレストスキルの育成	▶探究・プレストについてのワークショップ、講演会等を高校生、高校教員向けに開催	探究・ブレインストーミング型入試 (総合型選抜)  ▶50分間のブレインストーミングプログラム(アイデアを出し合うグループワーク)により主体性を測る ▶プレストで社会課題を解決してきた企業と共同開発	▶経営学科に所属 ▶ゼミ、企業連携授業等で探究・プレストを積極的に実践(教員はプレストの研修を受講済み) ▶一定のプレスト技術を持つ学生に「プレストファシリテーター」の認定証授与

高校—大学—社会をつなぐ教育改革ありきの入試

入試だけの改革は「点」にしかならない。まず入学後の教育を変え、そして高校にも働きかけ、人材育成の「線」をつくり上げようとする高崎商科大学の事例を紹介する。



広報・入試室長 鈴木洋文

すずきひろふみ●民間企業を経て1999年高崎商科大学短期大学(現在の高崎商科大学短期大学部)入職。入試担当、教務担当を経て2017年より現職。入職以来、一貫して高大接続に携わり、「Haul-Aプロジェクト」[3.5本の矢プロジェクト](産学連携教育)などの教育プログラムを考案、実践している。高校生・大学関係者向けの講演多数。

高校との関係を変えた簿記教育の高大連携

入職当初私は、高校との間に見えない壁を感じていました。「高校Ⅱお客様」という意識で、高校も「入学の押し売り」を警戒する。しかし、高校訪問を重ねてわかってきたのは、教育の話ならば高校は胸襟を開いてくれるということ。子どもたちが担う未来、そこで高校や大学が果たす役割を話題にすると、身を乗り出して聞いてくれるのです。この経験から私は、まず教育を変え、その特徴を伝える手段として入試と広報を考えることが大切だと気づきました。

教務に異動になり、最初に着手したのはが会計学科の簿記教育です。当時本学は、商業高校から「高校の学びをリセットし、日商簿記2級以上伸びない大学」と見られ

ていました。そこで、日商簿記1級取得者を多数輩出する岐阜商業高校に教えを請いに行きました。そこでわかったのは、高校教員が求める簿記教育とは、最難関の1級に挑むことによる人間的成長。本学でも人間力のある、地域で活躍する職業会計人の育成をめざしていたことから、早速2013年、「Haul-Aプロジェクト」を立ち上げました。これは連携する商業高校に簿記教育を提供し、高大7年間をかけて高度会計人を育てる取り組みです。翌年、受講生向けの入り口として「Haul-A特待生推薦入試」を開設。成績優秀で家庭の事情で就職する生徒が少なくないことを知り、授業料を免除しています。

協定校は全国40校。費用は全て大学負担ですが、結果的にマーケティング活動になっていいるほか、勉強熱心な特待生の存在は他学生の刺激にもなっています。

自己肯定感を育む教育と育成型入試

続いて経営学科の改革に着手。企業連携授業を進める中、元気な企業人に話を聞くと、どの人も自分をアップデートしながら主体的に未来をつくり出しています。本

学でもそうした力を養えないか模索していたところ、出会ったのが、^{*2}ブレインストーミングを原動力に次々と革新的な事業や人事制度を打ち出すIT系企業、^{*3}面白法人カヤックです。カヤック流のプレストでは上手な聞き手になることを重視しており、安心してアイデアを出せる環境下で発言を繰り返すうちに自信がつき、自己肯定感が高まるとのこと。IRの分析で、主体的にキャリアを築く学生は自己肯定感が高いことがわかっていたため、「これだ!」と感じ、社員の方を招いて教職員向けの研修を開催。経営学科の教育にもこの手法を取り入れています。

この特色を高校に伝える最適な広報手段として、本年度、カヤックと共同で開発した「探究・ブレインストーミング型」入試を始めます。プレストを通じて「主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ態度」を評価し、その評価結果を受験生にフィードバックする育成型の入試です。高校Ⅰ入試Ⅰ大学Ⅰ社会を教育という「線」でつなげようと、プレストをテーマにした高校生・教員向けのワークショップも始めました。こうした積み重ねが、回り回って自学の教育に対する理解、高校からの信頼を育てるのだと思っています。

*1 Haul-A(High school and university link for Accounting)
*2 brainstorming、略して、プレスト。集団でアイデアを出す会議
*3 Webプロモーション等を手掛ける。社員のアイデアを採用した「サイコロ絵」「スマイル絵」など斬新な人事制度でも有名

注目! ブレストの価値を広める 高校向けワークショップ開催

高崎商科大学では、教育改革を念頭に置き、プレストの教育価値を地元の高校に広める活動をしている。この7月には前橋市立前橋高校において、全教員対象のワークショップを開催。「理想の高校作り」について、班ごとにプレストを行った。同校で検討中の学校の将来構想に役立て、教員全員で取り組む態勢にすることが狙いだ。「未来の前橋を支える人材を育てるために、まず教員一人ひとりが考えを出し合い、変わりたい。プレストはテーマを自分事化しやすく、情熱が湧く。生徒の教育にも取り入れている」(同校田崎潤教諭)。講師として参加したカヤックの柴田史郎氏は「採用試験の参考になると考えて大学入試に興味を持った。高校や大学に関わり、長期的によい人材を育成していきたい。入試の企画参画もその一環で、評価をフィードバックするのもそれが成長につながるから」と語る。探究・ブレインストーミング型入試では、プレストの技術を身に付けた学生に、ファシリテーターとして参加してもらうことも検討中だ。

講師は大学職員とカヤックの社員が共同で務める



各自の教育や生徒への思いが次々とアイデアになって出てくる



出たアイデアは紙に書いて張り出し、賛成の案にはシールを貼る



「前橋市と連携した探究活動に取り組んでいる。進学実績だけが高校の価値ではない。地元で役立つ教育提供も重要な価値だ」(田崎潤教諭)



所在地／埼玉県上尾市
学生数／約2100人
学部／政治経済、人文、心理福祉
大学院／文化総合学、政治政策学、心理福祉学

「対話型」の総合型選抜で“対話”に満ちた大学教育に接続

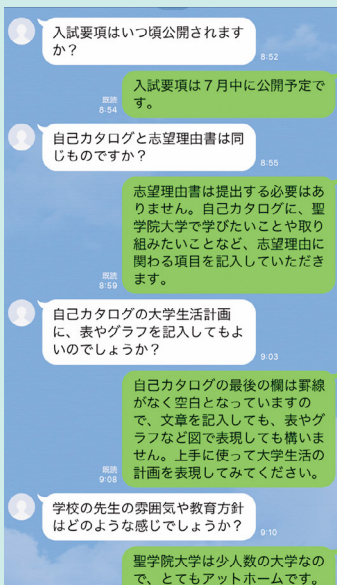
入 試			教 育
どういう高校生を	どういう方法で	何を評価して	タグライン
「対話」する姿勢や力のある高校生	アンバサダー入試 グループディスカッション、面接	他者の話を聞き、自分の考えを伝える力など	「一人を愛し、一人を育む。」 大学生活のウォーミングアップを行う 入学前準備学習 多くの授業を30人以下で行う 少人数教育 約10人の学生を1人の教員が担当する アドバイザー制度 など
日頃の授業を問題意識を持って受けていた高校生	課題解決入試 【講義方式】 講義ノート、発表、面接 【小論文方式】 小論文、面接	【講義方式】 講義を聞いて理解したことを伝え返す力など 【小論文方式】 文章を読んで理解したことを文章で返す力など	
「使える英語」の力を磨きたい高校生	英語特別入試 面接	自分の得意分野を伸ばしたいという熱意と向上心など	

注目！入試広報も“対話重視”で高校生の不安を取り除く

聖学院大学は、入試広報においても双方向のコミュニケーションを重視。本年6月には、高校生からの質問を受け付けるため、「LINEチャット個別相談」を設けた。普段使い慣れているSNSに窓口を設けることで、新しい選抜方式に興味を持った高校生が、気後れせず問い合わせできる環境を整えたのだという。

また、本年はコロナ禍の影響で、学校見学や説明会に多人数が参加するのが難しい。そのため、説明会の人数を絞って回数を多くするほか、Zoomを使ったWeb個別相談も拡充した。職員の負担は増えたが、例年よりも参加者が周りを気にせず質問しやすい状況になったそうだ。

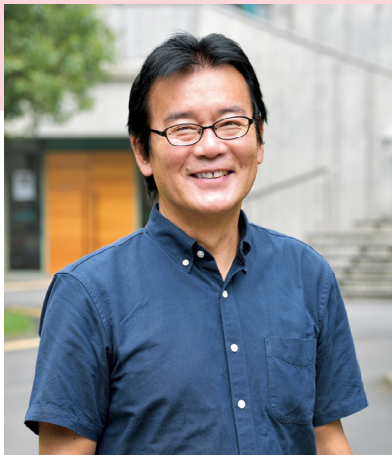
「本年は入試改革元年であり、コロナ禍もある。受験生とのコミュニケーションを密にして、不安を取り除く必要があるだろう。また、年内入試で合格が決まった生徒のフォローも必要。入学前にオンラインカフェのような場を提供して、大学とつながっているという安心感を伝えたい」（清水教授）。



◀LINEチャット個別相談では、入試に関する質問だけでなく、学科での学びや大学生活についての質問も受け付ける（画像はサンプル）。

CASE STUDY

入試の過程から学生を育てる 対話重視の総合型選抜



入試部入試広報特別担当 教授 清水均

しみずひとし●1981年上智大学文学部国文学科卒業。1988年上智大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程単位取得満期退学。上智大学非常勤講師、女子聖学院短期大学国文科助教授、成蹊大学非常勤講師等を経て、1999年聖学院大学人文学部日本文化学科助教授、2004年より同大学同学部同学科教授。

聖学院大学は2021年度入試から、総合型選抜を対話を重視した内容に一新した。この背景にある考え、新しい入試にかける思いを聞いた。

本学ならではの価値を 基に入試改革を実施

2021年度入試において本学は、共通テスト利用入試の新規導入と、総合型選抜の内容の見直しを行っています。共通テスト利用入試の導入は、新たな受験者層の開拓が目的ですが、総合型選抜の見直しは、本学を第1志望で受けに来る受験生に、もっと本学で学ぶ価値を意識して入学してもらうことにあります。

こうした見直しを行った理由には、創立30周年を機に本学ならではの価値について学内で話し合った結果が関係しています。

これまで本学は、「面倒見のよい大学」「入学後に学生が伸びる大学」であることを特徴として掲げてきました。しかし今では、多くの大学が同様の特徴を掲げている。

対話する力を通して 学力の3要素を評価

対話を重視する入試として、単願の総合型選抜「アンバサダー入試」を新たに実施します。アンバサダーとは、「代表的な存在」という意味です。この入試では、本

ます。本学での「面倒見がよい」とは何か、「入学後に学生が伸びる」のはなぜかについて、学生・教員・職員が参加するワークショップで議論しました。その結果出てきた答えが、「学内に対話が多く、対話の中で得た気づきを、次の成長につなげていること」つまり、本学ならではの価値は「対話」から生まれているのです。

確かに、講義後に学生が教員に進んで話しかけ、自身の理解を確認し深めている場面をよく見かけます。また、教職員や他の学生と話して自分を変わったとする学生も多くいます。ならば、そうした機会を意識して増やせば、対話が活性化して本学の価値はより高まるはず。入学後からではなく、受験生の時から対話を通じて学生を育てていけば、さらに教育効果は高まり、広報面の効果も期待できます。このように考えて、入試を見直すことにしたのです。

学に関心を持つ高校生に①ワークショップへの参加を通して本学の教育に接してもらい、②事前相談などで十分に理解を深めてから出願するように働きかけています。選抜では、③グループディスカッションや面接で「対話する力」などを評価します。対話は、相手の意見を受け止めて理解し、自分の考えを付け加えて相手に返す偶発的な行為です。その様子からは、とっさに相手の考えを理解する学力や、相手に学ぶ学習力、相手を思いやる人間性などが読み取れます。入試改革で求められている学力の3要素を十分に測ることができます。

残念ながらコロナ禍で、ワークショップの開催を見送るなど、本年度は入試の実施形態を変更せざるを得ませんでした。LINEチャットや動画などを活用して、受験生と対話し、大学への理解を深めることに努めています。

対話を重視する本学の姿勢は、タグライン「一人を愛し、一人を育む。」で表現しています。学生一人ひとりととの距離感を大切に、近すぎず、遠すぎず、見守りながら一人ひとりの可能性を育むことを、入試の段階から取り組み、本学のアンバサダーとなる学生を育てていきます。

*1 2018年に創立30周年を迎えた *2 提供する価値や理念を端的に表現した言葉。キャッチコピー等とは異なり、普遍的な「価値の定義付け」を示す



2023年春キャンパス構想図

所在地／埼玉県坂戸市
学生数／約7300人(うち医療栄養学科は350人)
学部／経済、現代政策、経営、理、薬
大学院／経済学、経営学、理学、薬学
▶THE世界大学ランキング2020 日本版／201+位

CASE STUDY

城西大学 薬学部医療栄養学科

多様な学習状況に対応した
入学前・初年次教育

付加価値の高い管理栄養士をめざし、意欲の高い入学者が集まるという同学科。
入学前後のきめ細かなサポートにより学力を底上げし、意欲も維持・向上させている。



教授 薬学部医療栄養学科主任 **真野 博**
まのひろし●1989年東京農業大学農学部農芸化学科卒業。1994年同大学大学院農学研究科農芸化学専攻博士後期課程修了。明海大学歯学部口腔解剖学講座助手、東京農業大学応用生物科学部バイオサイエンス学科講師を経て、2001年城西大学薬学部医療栄養学科講師。2005年准教授、2010年教授。2017年現職。

志望意欲を重視して
多様な学生を受け入れ

本学科は、薬学の知識・技能を持った管理栄養士を育成する医療栄養の専門学科です。薬物治療などの科目も必修であるため、一般的な養成課程よりも学修量が多いカリキュラムになっています。しかし入試は、専門の学修に必要な化学や生物を必須にせず、高校でそれらを履修していない学生も入学できるようにしています。入学者の学習状況は多様ですが、「医療栄養や食を通じて人の役に立ちたい」という思いは皆同じ。それは、祖父の糖尿病が食事療法で改善したなどの体験から、「自分もそのような仕事したい」と本学科を志望する学生の多さからわかります。その気持ちをもち続けて4年間しっかりと学修すれば十分

に管理栄養士の国家試験に合格できます。そのための教育体制を本学科は整えています。

基礎学力と学修習慣を
1年前期までに定着

学力や学修習慣が多様な学生を専門教育に接続させるには、合格後から1年前期までが勝負です。化学と生物の基礎学力を身に付け、学修習慣の定着を図るため、本学科は入学前教育や初年次教育、学修サポートに力を入れています。

まず入学前教育では、化学や生物を履修していない初学者が基礎の基礎から学べるように、本学オリジナル課題と外部のプログラムを組み合わせた教材を使用しています。以前はオリジナル課題だけでしたが、化学や生物が得意な教員が作成すると「これくらいはできるはず」という期待値が入り、課題の難易度が上がってしまいました。そのため、今は外部のものも活用して、初学者が取り組みやすい工夫をしています。

初年次教育では、学修↓確認↓復習のサイクルを通して、基礎学力と学修習慣の定着を図っています。隔週の水曜日に課外で行っている化学と生物のリメディアル講義では、1、2限にテキスト解説

と問題演習、3限に確認テスト、4限に補講を行います。それを半期に8回実施する中で、学生に大学での学修の型ができてきます。

基礎学力や学修習慣も大切ですが、学修の継続にはモチベーションの維持が欠かせません。特に1年生は、生活環境が変わる不安からモチベーションが低下する可能性があります。そのため、先輩学生への質問制度を設けて、不安解消を図っています。先輩学生は、自分の振り返りや、人の助けになることから積極的に協力してくれています。後輩への伝え方について相談を受けることもあります。

入学後は、1人の教員が4、5人の学生を受け持つ担任制で学修をサポートします。学生に相談しやすい関係をつくるため、半期に2回の面談を実施。学生の学修状況は、半期ごとに教員間で成績を共有し把握しています。入学前教育の成績や課題の提出状況などのデータを活用すると、半年早くその把握ができるようになります。このことは、担任が学生に対するサポートを考えるうえで大変役立っています。

これからも、入学前後で学修の土台を丁寧につくり上げ、多様な学生を「付加価値の高い管理栄養士」に育てていきます。

学力に加えモチベーションの向上も図る入学前後の教育

	入学予定者の状態	入学前教育	初年次教育	専門教育
学力・学修習慣	多様化 生徒によって異なる多様な学習状況 ・化学や生物を履修していない ・数学が苦手 ……など	多様化への対応 大学オリジナル課題 ＋ 初学者向けの教育プログラム	定着 化学、生物の復習授業 [講義と問題演習 →確認テスト →不合格者は補講] のサイクルで定着を図る	付加価値の高い管理栄養士になるための 基礎学力の定着と学修習慣の確立
モチベーション	高い 医療栄養や食を通して、人の役に立ちたいという強い気持ち	維持 入学前の不安解消を目的とした ・メールやTwitterによる先輩学生への質問制度 ・YouTube等による学科情報の発信	向上 ・1人の専任教員が学生4～5人を受け持つ担任制度 ・入学前教育のデータを活用した個別指導	

注目! **さまざまなチャネルを使った
情報提供により不安を解消**

同学科が大切にする「高いモチベーション」を大きく揺るがしかねなかったのが今回のコロナ禍だ。「キャンパスに来て授業を受けることで得られる満足感が、本年はない状態。不安や欠落感を埋めようと、あらゆるチャネルを駆使して情報を提供しています」と語るのは、真野教授と共に情報発信の中心役を担う君羅好史助教だ。

先輩学生への質問制度には、メールのほかにTwitterを追加。匿名で質問できるようにしたところ、200件超の投稿が寄せられた。YouTubeでは、学科や教員紹介の動画のほかラジオ番組も配信。気軽なおしゃべりで学びへの興味を喚起している。そのほか、Facebookで各種実習の様子を伝えたり、昼休みに教員と昼食をともにできる「Zoomランチ会」を開催したり。「SNSで発信する情報が新入生のモチベーションを支えているのは間違いありません。通常なら質問に来ないような学生がチャットで話しかてくるなどポジティブな面も多い」と真野教授は手応えを感じている。



YouTube:ラジオ番組配信



Facebook:授業の裏側紹介



Zoom:教員とのランチ



所在地／東京都町田市
 学生数／10067人
 学群／リベラルアーツ、芸術文化、ビジネスマネジメント、健康福祉、グローバル・コミュニケーション、航空・マネジメント
 大学院／国際学、老年学、大学アドミニストレーション、経営学、言語教育、心理学
 ▶THE世界大学ランキング2020 日本版／＝95位

教育・入試・高大接続改革と募集状況の変遷

年度	～2007	2014	2015	2016	2017	2018	2019
教育改革	▶リベラルアーツ系とプロフェッショナル系の学群制への移行 ▶メジャー・マイナー制、基盤教育の導入?			グローバル・コミュニケーション学群設置		芸術文化学群、健康福祉学群収容定員増	ビジネスマネジメント学群 新宿キャンパス移転
入試改革	▶1996年自分推薦制度導入 ▶1999年AO入試導入	▶学長直轄の入試広報戦略委員会発足 ▶全学学生募集広報PJ立ち上げ	▶一般入試に、基礎学力検査型試験、センターplus方式導入	▶センターplus日程追加	▶一般入試日程の大幅変更 ▶3科目の2科目判定セット導入 ▶検定料割引制度導入	▶4科目型入試、英語資格・検定試験の活用開始 ▶AO・推薦入試改編実施	▶一般入試学類化対応検討 ▶AO・推薦入試改編実施検討
高大接続			▶高校生育成型プログラムの調査、検討、プログラム開発	▶AO・推薦準備セミナー開始	▶高校生応援プロジェクト開始	▶AO・推薦準備セミナーの学校別・地方展開導入	▶「ディスカバ!」への名称変更とブランド化
募集状況 (総志願者数)	10380人	7047人	7465人	8273人	10269人	14089人	22724人

注目! オンライン化で拡大、進化する「ディスカバ!」プログラム

2017年度に参加者184人で始まり、2019年度は40プログラムに延べ1700人が参加するまでに拡大した「ディスカバ!」。申込者の44%が志望度の高い高3生、残りが探究学習に関心の高い高1、2生。女子が7割を占め、進学実績のない高校からの参加者もいる。コロナ禍により一斉休校が始まった3月から、がぜん高校生や高校からの注目が高まった。大学は休校中に探究活動ができない高校生のためにオンライン開催を決定。「#臨時休校あなたは何する」というハッシュタグと共にSNSで告知した結果、海外在住者を含め1364人が参加。「全国100人の高校生が協力し合い、リモートで合唱の動画を作成」「高校生が大学生相手にSDGsのワークショップを実施」といった、オンラインならではの成果が生まれた。ディスカバ!事務局でコーディネーターを務める今村亮氏は、「連携校7校のうち4校は、コロナ禍の下での実施を通じて加わったもので、先生方からの信頼の高まりを感じた。今後も本学の高大連携の軸にしたい」と語る。



ディスカバ! オンラインの専用サイト。
 ①動画で視聴⇒②申し込み⇒③課題提出⇒④表彰式の4ステップで進む

オンライン表彰式では、教員やスタッフの学生からのフィードバックを受ける



SDGsのワークショップの様子

CASE STUDY

入学前からエンゲージメントを築き 入学者の質と数を確保

一時は7千人台に落ち込んだ志願者数を、約2.4万人にまで押し上げた桜美林大学。背景には、総合型選抜と連動した高大連携を軸に培った、高校からの信頼感がある。



入学部(アドミッションズ) オフィス 部長 高原幸治

たかはらこうじ ●2008年桜美林大学大学院・大学アドミニストレーション研究科修了。大学卒業後、中学生や高校生を主な対象とした国際交流プログラム、海外留学を企画運営する会社に就職。2002年より学校法人桜美林学園に移り、入学部、国際交流、改組準備室、就職支援、学生支援などの部署を経て現職。

自己申告書の質の低下に 大学の危機を感じた

本学は1989年以降、断続的な教育改革に取り組み、2007年に学群制の完成を見ました。しかし以降、志願者数はなだらかに下降し、2014年は約7千人にまで落ち込みます。

志願者の質も変化しました。2015年、8年ぶりに入試の現場に復帰して驚いたのは、AO入試の自己申告書のレベルが大きく下がっていたこと。年内入試が定員の半分強を占める本学にとって、それは教育の危機だと感じました。そもそも学群制やリベラルアーツなど時代を先取りした教育が、募集につながっていないことも課題です。志願者の質と数を同時に上げる糸口になったのが、キャリア開発センターによる自己分析講座

です。これまでの学修や活動を整理し、将来の目標とつなげて考えることは高校生も大学生も同じと考え、*1「AO・推薦準備セミナー」を開発。初年度から約2000人が集まり、出願書類作成(アウットプット)の指導が課題だった高校から大変感謝されました。しかし、書けるようにはなっても中身が十分でないことに気づきました。

総合型選抜で求める学生は、高校時代に自分のコミュニケーションを越えて出会った仲間と何かに打ち込んだ経験を持つ人。そうした活動の場を提供すれば、将来的に自己申告書、ひいては志願者の質が上がると思え、翌年度から学びや体験の「中身」をインプットする「高校生応援プロジェクト」を始めました。2019年からは、これら2つの取り組みを*2「ディスカバ!」ブランドでくくっています。

入学までの各プロセスが 求める学生への準備活動

「ディスカバ!」のインプット支援ではSDGs、心理学、ミュージカル等、テーマごとに集まった高校生が個人やグループで、担当教員から出された課題に対して探究活動に取り組み、成果を発表してフィードバックを受けるしくみ

です。教員だけでなく在学生もスタッフとして活動を補助します。

総合型選抜の書類では、学校の枠を超えた活動、体験を将来に生かすための省察、志望分野に関する読書経験などの記入欄を設けることで、大学が求める人材像を受験生へ間接的に伝えていきます。一方、「ディスカバ!」は直接的に伝えるしくみです。高校生が入試への準備を通じて大学生になっていくプロセスを「よくする」ために行う高大連携の取り組みです。

「ディスカバ!」を通じ、高校との連携も深まっています。授業や部活動にプログラム提供する連携高校が現在7校。コロナ禍下で探究学習や課外活動に悩む高校からの相談は絶えません。こうした教育の方向性を同じくする高校とは、新たな高大連携校として緊密な関係を築きつつあります。

この春入学した「ディスカバ!」1期生83人から希望者を募り、入学までの期間「ディスカバ!」スタッフを務めてもらったところ、入学後の学びへの期待を大きく高める効果がありました。こうした効果を入学前教育でも引き起こせないかと、一部の学群で5教科の復習教材に代え、重きを置く思考力を高める入学前教育教材の活用も試行しています。

*1 現在は「総合・推薦型入試準備セミナー」
 *2 学校を飛び出して「1cm先の未来体験」へ。未来の可能性を発見(=discover)する高校生を応援

教育接続を強める 年内入試のポイント

まとめ

～安心して生徒を送り出し、
受け入れるサイクルをつくるには

18歳人口減の中、入学者の数と質を確保するには、志を同じくする高校との
教育連携を強め、お互い安心して生徒を送り出し受け入れる関係づくりが求められる。
そのサイクルをつくるしくみとして、年内入試を捉えていきたい。



高校との関係

これから 教育でつながる関係

施策アイデア

- ☐ 高校の教育課題に関心を持ち、教育の話を高校とする
- ☐ 探究学習やキャリア教育での連携サポート
- ☐ 自学が得意とする分野、教育手法を高校に提供する

入試広報

これから まず教育情報ありきの入試広報

施策アイデア

- ☐ 高校教員向けに教育の中身重視の情報発信
- ☐ 教育連携を通じた自学の教育体験の提供
- ☐ 低学年からのアプローチ

選抜方法

これから 高校教育と大学教育との 接続を意識した選抜

施策アイデア

- ☐ 欲しい学生像と一致した評価基準
- ☐ 探究学習の成果や学力の3要素を評価する
- ☐ 具体的な評価のフィードバックを通じて、望む学生像を伝える

入学前教育

これから 大学教育の始まり

施策アイデア

- ☐ 学力、学習力、モチベーションの3つを育てる
- ☐ 学習データを取得し、入学後の教育指導に活用
- ☐ 入学前教育についての広報強化